家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

57.3.11
明星図書館

第八十一巻第四号
日本幼稚園協会

4

保育者への推薦図書!!

これからの保育（全6巻）

●あなたの保育を深め充実させます。

大場牧夫・海　卓子・平井信義
本吉圓子・森上史朗　共著

A5軽装判・各256頁・セットケース入り

セット定価 9,600円

「保育」を原点にもどして考え直し、子どもたちの自主性の発達を助けたい。自由で生き生きとした保育を目指して保育者自らも高まりたい。

シリーズ「これからの保育」は、

1巻「遊び」とは何だろう　2巻「自由」とは何だろう
3巻「課題」とは何だろう　4巻「生活」とは何だろう
5巻「集団」とは何だろう　6巻「総合」とは何だろう

という命題について実践をふまえて重ねた討論から問題を提起します。

戦後保育史（全2巻）

●日本で初めての生きた保育史です。

編纂　岡田正章・久保いと・坂元彦太郎
穴戸健夫・鈴木政次郎・森上史朗

A5上製本・1巻580頁・2巻512頁・各巻ケース入り

セット定価 9,800円

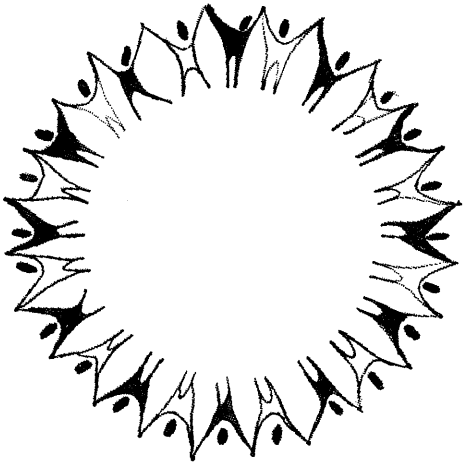
戦後から昭和51年までの保育界の流れを幼稚園、保育所、幼児文化の三つの側面からとらえた我が国で初めての戦後保育史です。文部省、厚生省の施策や保育カリキュラム、文化財の変遷等豊富な資料と証言をドキュメントに紹介しています。

第1巻（昭和20年～37年）
幼稚園とその保育　保育所とその保育
幼稚園と保育所の関連　学術文化
第2巻（昭和31年～51年）
幼稚園とその保育　保育所とその保育
幼稚園と保育所の関連　学術文化

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育



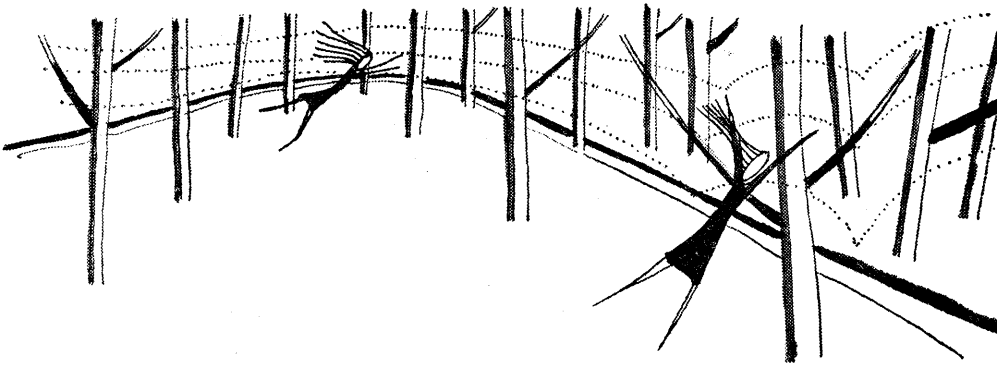
第八十一巻　第四号

幼児の教育　目次

——第八十一巻　四月号——

園児の減少……牛島義友…(4)
幼稚園と障害児……小林暉親…(6)
今日より明日へ……赤羽美代子…(10)
障害児は不安な子どもの代表者……飛田裕美…(13)
母の故郷　②
——福永津義・人間とその仕事——……高橋さやか…(16)
私の幼児教育論……畠瀬直子…(24)
私の保育……川口順子…(31)

© 1982
日本幼稚園協会



書評『赤ちゃんの愛欠病』……（36）

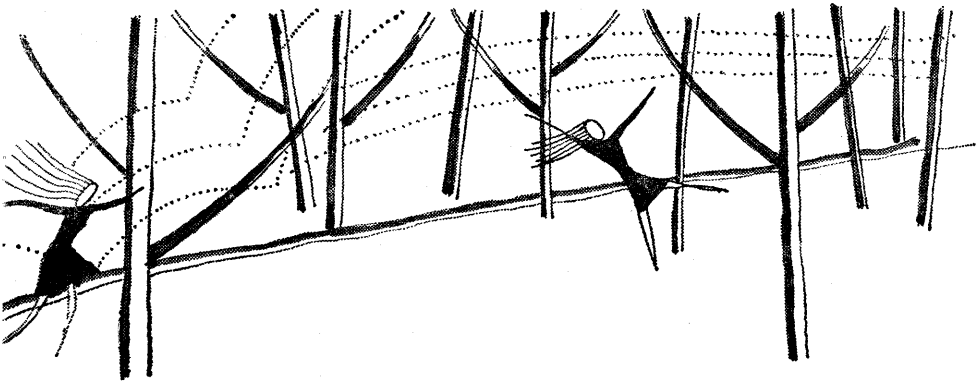
日本における最初の私立幼稚園とその背景　③
——和歌山県の稚児保育所と桜井女学校附属幼稚園——
……小林恵子…（38）

子どもの気持の表現にふれるとき　①
——水遊びを通して——……唐木久枝…（48）

保育の一日　⑤
——存在世界としての保育——……津守真…（56）

史料紹介
『邦訳　日葡辞書』　⑦
——わが国中世の児童文化史研究によせて——……（62）

表紙・うすい・しゅん
表紙題字・比田井和子
カット・福田理恵



園児の減少

牛島義友

一、学齢前児の教育の普及が徹底し、すでに頭打ちになった。しかも小児の出生率が減少したために、園児の減少が今や大きな問題となっている。幼児教育の必要を説いたり、発展の波に乗るのは楽しいことであるが、その反対の現象に対処することは苦しいことである。経営のことを考えなければ、幼稚園の子供の数が少ないことはよりよい教育のできる条件のはずである。小さな年少の園児たちが、三十人も四十人も一クラスにいることは、子供の方にとっても、また教える教師の側にとっても大変なことがらである。この機会にクラスの定員を減らすことはできないものであろうか。

私達が三十数年前に愛育幼稚園を開いた時に一クラス二十五名ではじめ、その後も同じ位であるが、このために経営時に困ることはなかった。現在の定数を大幅に減らすことは経営者にとっては勇気のいることと思うが、二十五人位の人数でできないはずはないし、またイギリスなどの幼稚園ではもっと少ない数である。小さい学校ほどよい学校と云う考えに立つべきであるし、マンモス幼稚園はこの際脱皮改変すべきではなかろうか。あるいはまた一つのクラスを二人で受け持つという仕組みも考えられてよい。殊に

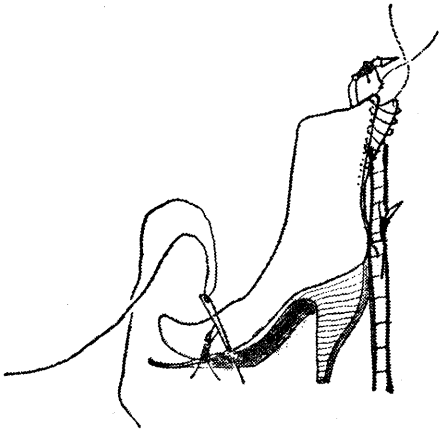
障害児を皆と一しょに保育するには複数の教師であることが絶対に必要である。進んで障害児保育を表明することによって、教育費の援助が得られるならばこの方向に進むのも大切なことではなかろうか。

二、幼稚園、特に私立幼稚園においては、幼児の教育に関するさまざまの社会的ニードに対応するのがよかろう。元来幼稚園の園舎ほど年間の使用時間から云ってぜいたくな施設はない。働らく母親のことを考えた延長保育も別わくで計画してもよいはずだし、小学低学年の学童保育もこの出身園で引き受けてくれるならば親たちは安心して任せられるであろう。あるいはまた教室や塾の運営も悪いことではないし、特に学習不振の学童のために補習教育をしてやることなどは、幼稚園としてもよい仕事であろう。今日の小学校教育は幼稚園の雰囲気と余りにも相異するために適応の困難な子供も少なくない。しかもこのような子供に対して、学校側はほとんど手を打とうとしないので、幼稚園側が卒園児に対して積極的指導を採ることが望ましいことではなかろうか。児童館的役割を積極的にとって地域への貢献を試みたいものである。

三、幼稚園の移動

都市における幼稚園児の減少には住宅地との関係が強い。大都市になると住宅は都心から離れて行くし、さらに若い世帯の住める場所は団地などに向って行く。したがって都心にあった幼稚園が園児が減少するのは当り前であり、園児だけでなく、小学校でも学童がどんどん減っている。元来幼稚園は住居から歩いて通える範囲内に数多くあることが望ましい。したがって住宅事情に応じて当然幼稚園は移動してもよいはずである。このような移動の必要なのは幼稚園のみならず、教会、診療所、商店、デパートなどもこの流れに従おうとしている。しかも都心で幼稚園を持っている人は地価の関係からその気になれば、郊外で広い幼稚園、または複数の幼稚園を作ることが可能である。私立大学なども都心から郊外に移ることによって飛躍的発展を遂げている。大学はその所在地に学生が集まって来るが、幼稚園は住宅地のあとを追う必要がある。一つの団地も幼児の生長に伴なってニードが少なくなるので、永久的施設を造ると云うよりも、たえず移動しながら発展する形態を考えるべきでなかろうか。

幼稚園と障害児



小林暉親

新年度をスタートするにあたって、おそらく、ほとんどの幼稚園に、一人か二人位の〝手のかかる子〟或いは〝障害児〟が入園しているのではないでしょうか。中には、園全体で十名近く障害児が在籍しており、県などから補助金（私立幼稚園特殊教育費補助）を受けている園もあるでしょう。そしてこの傾向は、ここ数年とみに増加しているようです。

このように、以前、幼稚園に入園させるために、前の日から父兄が徹夜して並んでいた時代には、一部の園を除いては、見向きもされなかったばかりか、むしろ、は

じきだされていた〃手のかかる子〃〃障害児〃が、各園で受け入れられるようになってきた背景には、一体、どんな事があるのでしょう。

一つには、障害児保育が、障害児関係者と父母から強く叫ばれ、その声によって、保育園における障害児保育の実践が進み、これまでの一部の保育園・幼稚園の問題から、一定の社会的評価を受けるようになり、その波が、幼稚園全体にも強く影響し始めた事。二つには、国際障害者年のスローガンを中心に、障害児の事が広く一般に理解され、幼稚園側も、対父兄、対職員への配慮の面で、障害児を受け入れやすくなってきた事。三つには、全国的に乳幼児数が減少し、互いに過当競争となり、私立幼稚園の経営上、少々手のかかる子とわかっていても、とらざるをえなくなってきた事、などがあげられます。ちなみに、神奈川県小児医療相談センターが行なった調査の中の〃幼稚園における障害児入園許可理由について〃によれば、

①園児に障害があるのを知らないで入園させた　52.2％

②園児に問題ないし、障害がある事を知ってて入園させた　47.8％

で、知って入れた理由として、○他にその子の行き場がない　○児童相談所よりの依頼　○知人の依頼　○地域との関係で拒否できなくて　○親に泣きつかれ仕方なく、そして、○定数までの園児がいないから、があげられていました。おそらく、この最後の理由はこれからも増えるでしょう。

ともあれ、時代の一つの流れとして、これから益々、幼稚園に障害児が多く入園してくる事になると思われます。ただ問題は、現在の建物・設備・職員数などの厳しい条件のもとで、どうしたらうまく、一般の子供と障害児との混合（統合）保育ができるかです。良心的な保育をしようとすればする程、直接担当する先生方は、障害児の扱い方で、他の健康な子供達への配慮の事で、障害児の親との接し方で、対父母会の事で、同じ園の職員の事で、等々たくさん悩まれてしまう事でしょう。

最近は、随分〃障害児保育〃に関する本や雑誌が出版

されるようになってきました。その中には、障害児保育のテキストになるような物もあります。又、それらの中の先輩達の実践報告は、皆さんのお役にきっと立つでしょう。しかし、皆さんが、どんなにたくさんそれらの本を読んだとしても、それだけではどこかものたらなさが残るのではないでしょうか。それは、それらの本の中にでてくる子供達は、決して、今、あなたが抱えている子供と全く同じではないからです。そして、その子供を教育しようとしているのは、本の中の先生ではなく、あなただからです。又、おかれている条件も様々だからです。ですから、自分の園の条件の中で、今、目の前にしている障害児と他の三十数名の子供達とを、一緒にどうしたら保育できるかは、決して本のどこにも全ては書いていないのです。それではどうしたらよいのでしょう。

それは、あなたの園がある、その地域の障害児を扱っている専門家と相談し合い、協力し合い、共に子供を育てる事だと思います。私は、〇～三歳位の障害児を扱っている立場上、多くの障害児を受け入れている保育園や幼稚園の先生方とお会いしますが、幼稚園と保育園を比較して一番強く感じる事は、保育園に比べ幼稚園の先生方は、障害児関係の専門家との係りが少ない、という事です。それは、保育園が厚生省関係という事もあり、地域行政の中でも、障害児関係の人々と同じ福祉関係の部・課、に所属する事が多く、共に連携しやすいという事があるのでしょう。それに比べ幼稚園は、一部の熱心な地域を除いて、福祉関係の専門家とは、個々の知人関係を除いた、組織的な関係が皆無に等しいようです。そのため、勢い、障害児を抱えると、その園だけで、その担任だけが悩みを抱えこんでしまって、袋小路に陥っている場合が多いようです。しかし、本当は、障害児を扱っている専門家達は、もっともっと、障害児を抱えている幼稚園の先生方と接触し、共に障害児を育てたいと願っているのです。しかし、残念ながら、まだ一部の園では、他人が園の保育の中に入るのは困る、と拒否される方もおられます。そんな場合、無理して立ち入る事はできません。そこで、是非、現場の先生方からの、内から

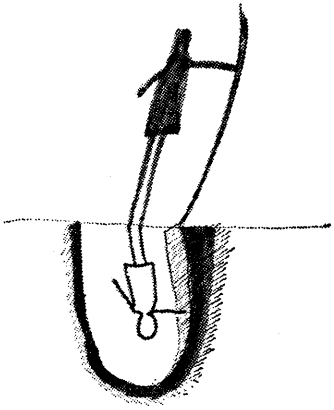
の呼びかけが必要なのです。そうすればきっと、それぞれ専門の先生方は、〃本〃以上の適切なアドバイスをして下さるでしょう。

では、実際には、地域にどんな専門の先生方がいて、誰に相談したらよいか、ですが、まず身近に、障害児関係の施設（障害児センター、精神薄弱児通園施設、肢体不自由児通園施設、簡易マザーズホーム、言語治療室、等）があったらそこの先生方に相談してみて下さい。特に56年度より、厚生省では〃心身障害児（者）外来療育相談事業〃として、障害児関係施設は、積極的に地域にいる障害児や親、或いは関係者への相談業務を行ないなさい、と補助金をつけ始めております。まだこの事業は一部の地域でしかスタートしておりませんが、年々、全国各地域に広がり、その療育相談の中味も充実していく事でしょう。又、もし、身近にそのような施設やよい先生がいなかったら、保健所や市町村にいる保健婦さんに相談して下さい。保健婦さん自身が相談にのってくれたり、或いはより適切な専門家を紹介して下さるでしょう。又、児童相談所の先生方もよい相談相手になって下さるでしょう。お医者さんと相談する時は、よく障害児の事を知っているお医者さんに相談して下さい。医者の発言は社会的権威が強いだけに、あまり障害児を知らない方に相談し、不適切なアドバイスをもらうと、保育が身動きできなくなる場合があります。ともかく、大学の偉い先生方ではなく、身近な、地域にいる専門家に相談する事です。

要は、一人で孤立しない事。相談相手（障害児についての専門家）をみつけ何でも相談する事。できれば一か月毎に保育記録をまとめ、学期に一度はケース会議を開いて、同僚や園長や専門家などのアドバイスを受ける事。これらの事を積み上げていく事が、単に障害児を園の或いはクラスのお客様として終らせる事なく、障害児と一般の子供達との混合（統合）保育を成功させる鍵になると思います。

（千葉県・八千代親子相談室）

今日より明日へ



赤羽美代子

Tは先天的に、心臓に幾つかの障害をもった男児である。Tの全身は、つきたてのお餅のようで、白くブアーッと脹らみ、肌はポテリと弛み、生気がない。顔面蒼白、口唇は紫色。2・3歩、歩むと、すぐ蹲まる。ことばにならない、力の入らない声を発する。

そのTは、3歳の誕生日を迎えた時、無事に心臓の手術を完了した。

数ヵ月後に、Tが3歳児で入園してきた。比較的血色はよく、蹲まる事もなく、目元も確かである。ただ、Tのことばを解する事は、Tの家族さえ難解を極める。困

った事にTが、自分の話が相手に通じない事を感じている。相手がTに聞き返すと、シュンと頭を下げて、むっつりとだまり、締めてしまう。

Tは、朝早く元気に登園してくる「オットアッター」日本語では書けない発音で語り出す。このTの第一声に、教師は緊張する。すばやくTの目線、指先を追い、Tが何を見、何を指さし、何を語りたいかを、全身で理解する努力をしなければならない。Tが元気に登園した最初の時間に「受け入れられていない自分」と理解して、自らの心を閉ざす事のないように注意する。

教師は、まず心の中でTのことばを繰り返す「靴下を指さしていたし？　目は前方を見ていたし？　昨日遊んだ、スクーターの事かな？」……「Tちゃん、車庫へ急がないとお友だちが乗ってしまうわよ」教師は「君のことばは、確かに理解した」と、云う意味を込めて、どうどうと云ってみる。T「うん。オットアッター」と、力強く云い、運動神経未発達の足元で、ドタンスタンと馳けて行く。

遊び仲間の3歳児は、Tの難解なことばを解し、Tとよく遊ぶ。お食事の時、Tの周囲には各年齢層、入り交って着席している。Tが5歳児の肩を叩き「デデデトウテイトウ」と云う。5歳児は御飯を口に含んだまま、じっとTの顔を見つめる。すると隣席の3歳児が「先生にチョコレート、と云ったんだよ」

5歳児「先生にチョコレート上げるの？」

T「うん。ムミームトウテイトウ」

3歳児「クリームチョコレートだってさ」

5歳児「いちご組（3歳児）の子って凄いなー。Tちゃんの話が解っちゃうんだね。どうしてかなー」と首を傾げ、顔を紅潮させて感激している。

以上の事例のような状態が、二学期の終了を迎えるまで、続いた。T自身、周囲の者が驚く程、発音がはっきりしてきた。それに、大分おしゃべりとなり、T語で容赦なく語る。殊に、年長組がTのことばを理解しようと努力する姿は、真に、ほほえましい。

幼児自身は、その自覚が薄いとしても、それぞれに小

さな重荷を背負い、小さな生の旅路を織りなしている。まず、旅の始まりに、この、いと小さき者の集団が、彼らの憩いの場となり、重荷を下ろして、身も心も解放される家となればと、理解し、その憩う場として園は提供されていると考えている。憩いの家の教師は「神様との責任関係」を果す者であり「今日より明日へ」一歩一歩、成長する幼児の発達の手伝いをする為に、この場にある者である。しかし「愛の責任をもって行なう」働き人でありたいと願いつつも、未熟な我われには、或る時には、真に苛酷な架台である。「仕えられる者でなく、仕える者」として用いられている私たちに、神様が託された、ひとりひとりの、大切な幼児である。

幸い、R園の教師は、この考え方を、共に選択し、選びとり、保育の土台に据えて、幼児と教師の関係を整え、保育学を学び合い、努力をしている積りであるが……。

園児の背後に、互いに認め、励まし、高め合う、力強い教師集団がなければ、障害児を交えた幼児の群は、いと貧しき集団となりましょう。Tが、今日より明日へと確かな足跡を残せるよう、教師も、明日に向かって行く者でありたいと願い続けております。

（霊南坂幼稚園）

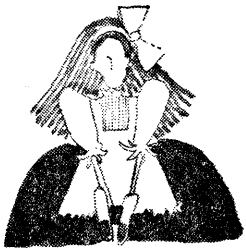
「最終回」

いつも仲好しで遊んでいるS子とY子、ここのところ毎日白雪姫ごっこにこっている。朝からひとしきりやっている間に、女の子たちが何人か一緒に入ってやっていたが、やがて三々五々違うあそびに移っていった。やりはじめた二人は今日も朝からずっとなので、よくまあ、くりかえし続くことと思っていると、とうとうS子が言った。

「ねえ、Y子ちゃん、白雪姫ごっこはもう最終回にしましょうよ。」Y子はそれに答えて言った。「いいわよ、じゃあこれで最終回よ。また明日の朝しましょうね。」　（K）

障害児は不安な子どもの代表者

飛田裕美



本当にいろいろな子どもがいるのだな——保育者になって三年経とうとしている私の、相変わらずの実感である。そして四回目の入園式に迎える新たな出会いを思って、心はまた準備体操を始めようとしている。

入園児の中には、〝障害児〟と呼ばれる子どももいる。しかし、ひとりを育てようとする保育の中で、個々の子どものことを考える保育者の姿勢には、〝障害児〟についても〝普通の子ども〟についても、基本的には違いはないと思う。〝障害児〟の中にも、集団のルールに従いながら園生活を楽しむ子どももいるし、〝普通の子ども〟

の中にも、自分の殻に囚われて遊びに飛び込んで行けない子どももいる。抱えている問題は様々なので、個々に対応した援助が必要であり、それぞれの子どもに可能性の広がりを期待しながらかかわることに於ては、何の区別もいらない。ただ、複雑な問題や、周囲の大きな心配を背負っている弱い子どもが障害児に代表されると見れば、そういう子どもに対しては特に、最も根本的な所での配慮を忘れてはならないと思う。そして、私達の幼稚園でも、模索しながらの実践を進めている。

私達の園では、入園前に二回、〃一日入園〃という日を設け、新入園の子どもが幼稚園で遊ぶ機会を作っている。子どもの中に幼稚園のイメージをより具体的に描いてもらい、四月の入園の不安を軽減させることを意図する一方、保育者の側でも子どもを観察し、迎える準備の材料のひとつにする。障害児を観察するのは他の子どもと同様で、複数の保育者の目で問題の大きさを予測し、環境づくりを検討する。

また、新入園の子ども・母親と保育者・幼稚園の相互理解に即効的なのが、家庭訪問である。特に障害児については、入園式の前日に行なった。周囲の変化に敏感で不安の強い彼らには、少しでも身近な所で面識のある人間の存在が、入園時の不安を和らげるのに役立つと思うし、保育者側も落ち着いた気持ちで迎えることができるからである。

いよいよ入園となると、多くの子どもが母親と離れることに不安を感じる。そこから自分の一歩を踏み出すまでの葛藤は子どもによって違うが、急激な環境の変化を避けて、保育時間を少しずつ延長したり、母親が見守れる場所を設けたりして、子どもの一歩を待つ時期がある。そして五月の始めには、全員がお弁当を食べる園生活に入って行く。大概の子どもはこのペースについて行けるが、中にはどうしてもついて行けない子どもがいることもあり、それは障害児とは限らない。その場合、その子どものペースで適当な方法を考えていくのである。

園生活の中では、子どもとのかかわりは保育者との信頼関係の基盤の上に成り立つが、言葉や行動から気持ち

をくみとることが難しい障害児の場合は、特に重要なことだと思う。子どもに、幼稚園が安心できる場所であり、そこには信頼できる人間があると感じてもらえるまで、たとえ一方通行の働きかけでも積み重ねて行かなければならないし、母親との協力体制も築いて行かなければならない。そして信頼関係の生成は、緊張からの解放とともに進んで行くようだ。

漸く安定した園生活の中で、子どもはあらゆることを学んで行くが、やはり共有して行く部分の少ないのが障害児である。彼らに必要な援助や指導を模索する中で、専門知識や経験の乏しい保育者としては判断しかねる問題も出て来る。そこで、信頼できる専門家に相談し、客観的な意見を参考にしながら、園での方針を決めて行く。この時も母親の理解と協力が必要であることは、言うまでもない。母親が心を開いてくれなければ、私達は壁にぶつかってしまう。母親が納得して、日常生活の中でも貫いて行けるような姿勢を見つけるために、相談には保育者・母親・子どもの三者で参加することにしている。

幼稚園の中での障害児の受けとめ方は、子どもによって様々である。避ける子ども・ちょっかいを出す子ども・世話をやく子ども・無関心な子ども。でもどの子どもも、保育者がその子どもとどうかかわっているかということは、よく見ているようだ。そして時には、そのかかわりを真似していると思われる姿も見られる。その度に、自分のかかわり方を思い直させられる。障害児に向ける暖かいまなざしは、障害児にとっても他の子どもにとっても、大切なものだと思う。そして、これは幼稚園の中だけのことではないと思う。

（まんとみ幼稚園）

母の故郷(ふるさと)②

――福永津義・人間(ひと)とその仕事――

高橋　さやか

（承前）

聖書にもとづいての神への思惟は、事に当り時に応じて（不断に手もとから離さない）聖書をひもとき、志しては創世記から黙示録までの通読をくり返すことにおいて、たゆみもなく深められた。聖書をくり返し熟読することによって自らのうちに啓示され鏤刻されて深まる信仰、ただ聖書に拠るところから由来するとも思われる超教派的な心情、聖書の中でも四福音書を大切に思い、四福音書の中でもヨハネによる福音書を最も愛していたこと、……津義の人格を特徴づけているキリスト教の、というよりキリストイエスその人のうけとめ方は、今日改めてよみ返すことによってうかがわれる「逆境の恩寵」の著者のあり方に似通い、その父の娘にまぎれもない、という思いがする。

実際に、「コリント人への手紙」の文言に納得しかね

る思いがあって母にただしたとき「それは、パウロの手紙だから、……あなたのおじいさま（規矩を指す）も、これはパウロの考えであって、イエスではない、とおっしゃったことがあったよ。……別の個所だったかもしれないけれど、とにかく、パウロのことばの中には、パウロの考えでそう言っているところもあるのね。」という風に答えてくれたことがあった。

津義のきもちの中で、聖書はもとより旧新約すべての書を尊重すべきには違いないが、しかもなお、絶対であるのはイエスのみ、というところがあったと思われる。彼女の日常生活を支える思考や行動の規準は聖書にあり、その聖書の理解・うけとめの規準は、必ずイエスに求められた。

このような信仰のあり方、生活者としての態度は、すべてその源流を、やはりその父規矩に発するものと見て間違いないと考える。

母校活水がそうであったし、規矩の知友にもメソジストの人々が多かったから、一応教派的にはメソジストに所属していたのは自然である。活水・幼稚園師範科を卒業したのが一九一二（明治四五）年、二年母校にのこって教鞭をとり、次いで福井メソジスト教会附属栄冠幼稚園に主任保姆として赴任した。同教会に牧師として赴任した福永盾雄と結婚したのが一九二〇年、盾雄は関西学院神学部出身、思うところあって福井教会在任一年一一ヵ月を以て教会を退き、夫妻携えて朝鮮開城市に渡ったが、教会を退いたあとも、所属教会はずっとメソジストであった。

ともあれ、結局要するに教派に執するきもちは、津義においてあまり強くはなかったといえるようである。

津義の母うた（信子）は、同志社に学んだことがあり、同志社の人脈の中には縁（えにし）につながる人々も少くないから、組合派もまた、親近な教派であった。

後半生において、バプテスト・ミッション立である西南学院の系列校に職を奉じ、小さいながら一校の責任を負う立場になったとき、「人が再婚するとき、再度の式をあげることも素直なあり方だ」といって信仰生活四十

年を過ぎた身で（バプテスト教会に所属するために）バプテスマをうけたのも、もともと「信仰は一つ」という超教派的な心情が、却ってこだわりもなく、再度信仰の証しを立てる形式に従ったものと思われる。

当然、ともいえよう、教派的教条的神学論争は好むところではなかった。

「イエスはどうなさったか」

「イエスはこうおっしゃっている」

仕事にかかわっても、生活的な問題に当っても、イエスに規範を求める津義の態度は、自然で、極めて自由な、ある意味でユニークなものであった。

素直で素朴な、真摯で熱心な（それ故に自由で自分独自な）聖書に忠実な信仰。それが、父母の遺産としてうけ継いだ、津義の信仰であった。

Ⅱ　系譜……その二

福永津義の、教育者・保育者としての立場は、当然、キリスト教教育者の立場であり、教育学の系譜からいえば、徹頭徹尾フレーベリアン、ということになる。

教育者として、津義に強烈な影響を与えたのは、先ず、活水の創立者、エリザベス・ラッセルである。

「ラッセル先生」とよぶとき、その声音には何ともいえない、ひとをなつかしむ切実な思いがひびいた。

精神的に如何にも骨太な、豪気な、パースナリティの持主が「ラッセル先生」であった。それはまた、津義自身の母うたに一脈通うものであり、教育者として世に立ち、動揺のない信念によって毅然と事に立ち向い、率直でしかも寛大な態度を持していたのは、母ゆずりでもあり恩師ゆずりでもあるように思われる。巧まずに折にふれて見せるユーモラスな一面も、培われた根は、同じところにあるのであろう。

「ヤング先生[註]は、優しい方でね、……ラッセル先生は、

大きな方だった」とも言っていた。

人格形成における師がミス・ラッセルであるのに対して、学問の師は、高森富士である。高森富士を通して、生涯傾倒することになったフレーベルが、津義の前にその全容をあらわしたのである。

高森富士（藤とも）は一八七七（明治一〇）年四月生れ、一八八四（明治一七）年活水の小学部に入学した活水生え抜きの先輩になる。津義は一八九〇年生れであるから、一三歳の後輩、奇しくもというべきか、津義が活水に入学したのも、一八九七年小学部に、であるから、丁度一三歳おくれて富士のあとを歩んでゆくことになった。

はじめ富士は、幼稚園の教師になることについてあまり進んだきもちになれず、熊本に出て英語の教師になろうと考えていた、という。それが、一九〇五年、幼稚園教育の専門家としてメリー・コーディが着任したことによって、富士の進路は大きく変ることになった。コーディは、活水における幼稚園教育の推進に当って、熱心に富士の協力を求め、やがて、富士の幼稚園教育者としての素質の優秀さを見抜いて、アメリカ留学の道を開き強くそれを推し進めた。富士は一九一四年シカゴ大学に、また一九一五年～一六年にはコロンビア大学に学び、一六年にバチェラー・オヴ・アーツを、一九一七年にはマスター・オヴ・アーツの学位を得た。このようにして、日本におけるキリスト教保育の草創期に、その歩みを先進国に劣らぬ水準に築き上げた、――そう言い得る実績をもたらした、その抜き難い主力をなした高森富士の存在が後進に仰がれることになる。

活水に幼稚園がおかれたのは一八九五年からであり、幼稚園保姆養成科のちの幼稚園師範科設置は、コーディ着任の一九〇五年であった。富士は、小学部、予備科、初等科、中等科、高等科を経て、コーディの助手をしながら幼稚園師範科のコースも学んだ。

津義が幼稚園師範科で高森富士の教えをうけたのは、富士の渡米留学前であるが、コーディの指導もあり、フレーベルの「人の教育」と「母の遊戯」は、すでにその

講義の最も主要なテキストであったと推定される。それは或いは原著からの英訳本であったろうか。（教育学のみならず、当時の活水では英語の講義の方が多く、「国文学のほかは、物理であれ、化学であれ、数学であれ、何でも英語で教えられたから、……幾何とか三角とかいっても、ほとんどわからなかったよ」と苦笑しながら津義が語ったことがある。）

「人之教育」「母の遊戯」ともに、（頌栄の）A・L・ハウ編、原田助訳のものを、津義は後年まで大切に用いていた。これらの初版は一九〇九年であるから、一九一〇～一二年を幼稚園師範科に在学した津義は、辛うじて、在学中に日本語訳を手にしたことかとも思われる。

「SONGS AND MUSIC OF FROEBEL'S MOTHER PLAY」――スザン・E・ブロウの英訳本が、いま、筆者の手もとにのこっている。これは在学中のテキストであったろうか。あるいは留学した富士から送られたものであったのかもしれない。

津義は、さきにも記したように幼稚園師範科卒業後二年母校にのこり、福井市栄冠幼稚園に赴任し、富士の留学中、一時再び母校の教壇に立っている。そしてまた再び栄冠幼稚園にもどっているが、このような間に、富士の学問研究は、卒業後も密接に津義に伝わったと思われる。

津義は、ドイツ語には親しまなかったから、フレーベルの原著に直接当ったことは（少くとも詳細には）なかったと思われるが、（その点よくも悪くも直観的に、とでも言うよりほかはないようであるが）自覚としては真底、フレーベルその人に心酔傾倒するようになる、……しかし、その道すじは、高森富士と、富士を通じてスザン・ブロウによって開かれたものと言わなければならないようである。

富士は、コロンビア大学の児童研究所で、J・デュウィの謦咳にも接し、パティ・S・ヒルとも親しく交わった……ヒルの「幼稚園教育課程」の日本語訳も出しているけれども、ブロウを最も重んじていた。フレーベル教育学の本義を最もよく理解しているのはブロウだという

のが富士の見解で、津義は、師のそのうけとめ方に全面的に同調していた。

日本の保育史――幼稚園教育史の中で、フレーベルは官学系でも私学系でも一応は宗本として重きをなしている。よく知られているように一八七六（明治九）年、東京女子師範に最初の公立幼稚園が設置された時、招かれて指導に当ったのは松野クララ夫人――フレーベルに直接教えをうけた一人に数えられる人であった。これに対して、私学――活水にして、頌栄にしろ、保姆養成校をひらいたミッションスクールは同じフレーベル思想とはいっても、アメリカ経由のフレーベルであったと見ることができるであろう。前述のA・L・ハウ編の「人之教育」も、英訳からの重訳である。（ハウあてのフレーベル未亡人ルイーゼ・フレーベルの感謝状をも巻頭におく「人之教育」は、精度の高い訳として評価されるものであろうけれども）

アメリカを経由したフレーベルは、恐らくかなり実用主義的な闊達さ、あるいは平明さを帯びることになったのではないだろうか。

デュウイがフレーベルを一面相当に高く評価し、他面、強く批判していることは、幼児教育を学ぶほどのものにはよく知られているところであろう。P・S・ヒルは、デュウイの思想の、幼稚園教育実践の場におけるよき実現者であったと考えられる。彼女の考案になる中型積木――第五・第六恩物の拡大――は、たしかに、形の上からもフレーベルの評価とフレーベル批判・フレーベル打破の考え方をともに具体化したものと見ることができそうである。小型積木で、机上に小宇宙を観念する、というような志向をもつ恩物から、子どもがそれで遊ぶとき、自分の身体・筋肉を駆使し、活動の場を構成したり、構造力を養うような、実際的実用的な教材として、「ヒルの積木」は、たしかに恩物の枠を打破発展させたものと言えるのであろう。

フレーベルの教育理念は、言うにも及ばず「人の教育」（「人間の教育」）にあるには違いないが、その実践的教材として「恩物」をとるか「母の遊戯」（「母の歌と

愛撫の歌」）をとるかにおいて、理念のうけ容れ、また展開に、実践の姿勢に、かなりのちがいが生ずるのは、筆者ばかりであろうか。

「恩物」は、まさしく教具教材である。固定的な実在である。そこにそれがある以上、眼前にある実物について批判することは、如何にも直接的な、的に中る批判となり易いに違いない。事実フレーベル批判のほとんどは「恩物」批判に通じる。曰く象徴主義、曰く観念主義、技巧訓練への偏向、……実用主義哲学が、それを葬ろうとするのに不思議はない。

一方で、「恩物」を重視しつづけるフレーベル主義も教育・保育界で全く失われたわけではない。

しかし、スザン・ブロウや高森富士は、明らかに「恩物」に優って、「母の遊戯」のうけとめに意を用いたと考えられる。

ブロウ訳「母の遊戯」は、かなり意訳的なのではないかと思われる。語学に疎い筆者は、言うに甚だ憚り多く心もとないのであるが、その意訳が、逐語的直訳よりも、よりフレーベルの真意に即している、というように、高森富士がうけとめ、そして、津義もそのように解していたふしがある。

スザン・ブロウにしろ、高森富士にしろ、フレーベルの理念は、観念的に空転しているものではなく、生活者人間の、生活そのもの、生きざまそのものにかかわる、したたかな実践理念である、と見定めていたと考えられる。

津義は、まともに、高森富士――スザン・ブロウの系譜……流れを遡って、フレーベルの原泉に没入したのだと思われる。

津義が、幼稚園教育において、幼稚園や教会に繋る母親教育・婦人会活動において、そして、自分自身母親としてのいとなみにおいて、活動のあり方すべてをフレーベルの方法論で充当していた、――まさしく理念・考え方といったものではなく、直接具体的な活動方式、現実処理のし方としてのフレーベル法とでもいえよう――そのあり様は、筆者には極めて特異なものに思われる。そ

れは、幼稚園のカリキュラムに、恩物を使う、とか、「母の遊戯」を保姆養成校の講義や、母の会の講話でとりあげるとか、という程度の、一通りのあり方ではなかった。彼女は、一々現実に、日常的に、子どもとともに試したりしらべたり、工夫して造形したり、創作したり、そして、子ども自身が一人ひとりのその子のやり方で生きるあり様に対応し、子どもと同様な、常に新しい体験に向って感覚器官を、そして全身全霊を展開し伸長させようとする態勢、を維持しつづけた。それが彼女の「フレーベルの流儀」であった。

いずれ、後章でいくらかでも具体的に、津義の「フレーベル法（フレーベルの流儀）」について述べることにしたい。ここでは、その、極めて特異な、しかし、むしろ津義自身の独特の流儀としてフレーベルの真髄に迫りつづけたそのあり様が、やはり、高森富士スザン・ブロウの先蹤をもつものであることを明らかにしておきたかった次第である。

（つづく）

（西南女学院）

註　マリアナ・ヤング女史。一八九七年来任、一八九八年活水女学校（当時）第二代校長となった。

私の幼児教育論

畠瀬直子

〝幼児教育論〟といえるものを私はまだ持っていない。いや、当分持ちたくもない。だからといって幼児教育を考えないと誤解されては困る。日夜、このテーマは脳裏から去ったことはないのだ。ただ、私は幼児がひとかたまりの粘土をあくことなく作り変えることを楽しむように、考えたりまとめたりするプロセスが好きなのである。思いもよらない発見に感激して、それまでの考え方を修正したりする瞬間は、無上の喜びを感じる。これでは一生かかっても幼児教育論は出来ないかも知れないが、それでいいと思う。激変する社会を生き、硬化した思考の持主の机上論を聞きすぎて、自分の思考を『論』としてまとめることに用心深くなってしまったのだから。

さて、懐しい母校に事務局を置く教育誌からの依頼は、ことわりたいという気持をみじんも起こさせなかった。依頼状を読み終った途端、考えをまとめる方向で頭が動き始めた。こんなことは初めてである。

私が考えをまとめるのに影響しているのは、三つの視点であろう。第一は、母親としての経験である。臨床心理学を専攻したのは、女性心理学者が一番生き生きと才能を発揮している分野だったからだ。それほどに強い願いを持って大学院進学を決めた。子供を育てるある時

期、その願いは悲願に終りそうに見えた。子供はそれほどに大きい存在だった。この体験ぬきには、幼児の教育を語れない。第二は、臨床心理学の視点である。人間を、時間的流れの中で捉える視点である。私は、幼児を、学童期・思春期・青年期そして成人期という流れの中で見つめる。そうすると、幼児の未熟な部分も、不完全な部分も、そのまゝに重要な意味を帯びてくる。第三は、C・R・ロジャースのもとで学んだ経験である。私は、物ごころついた時には、大学に進む筈の子供として育てられていた。父と母は、よく学生時代の話をしていた。その中心は、恩師との交流であった。大学生活のイメージは〝師との出会い〟として私の中に定着していた。これが後年私を悩ませた。幼いイメージで創り上げたものがあまりに大きかったのだ。そして、人間に過大な期待をする自分が愚かだとの結論に達しかけていた。人間に対する夢を簡単に捨てるほうが誤っていることを気付かせてくれたのが、ロジャースである。私はついに師にめぐり合ったのだった。彼に、あらゆる人間の中に夢を見つける力も育ててもらった。

★コペルニクス的転回を始める時

私の子育ては、こんな風に始まった。息子が生れて百日目、父はお祝いに美しく焼きあげられた鯛を持って現れ、こう云った。

「直子、お前は親孝行などというものは一切しなくてよい。その代り、子供を粗末にしないでくれ。大切に育ててくれ。」

それは、研究者としてのスタートを切ろうとしていた私が、子育て重視に大きく針路変更する重みを持ったひとことだった。しばらく考える時を経て、総力をあげ心をこめて息子を育てる決心ができた。

だが、幼児として集団生活を始めた彼は、終始なさけない思いを私にぶつけてきた。「お約束守って仲よく遊ぼうと思うのに、みんな守らないの」「金魚のヒレは七まいあるのに、『わー、はたせアホやな、そんなにあるもんか』って云うの。ボク、くやしい！」「赤ずきんち

ゃんがオオカミに食べられるところがいやなの。それなのに、みんな大好きで、その紙芝居ばかりしてっていうの」

心をこめて育てられた子供なんて、集団にはいると情ないものである。子供の安らかな寝顔を見つめて、「心のやさしい子供に育ててごめんね」とつぶやく日が続いた。それでも彼が経つつある体験は貴重なものであり、どんなにつらくとも彼自身が生きぬかねばならないと考えた。もちろん、こっけいな努力も随分した。あるとき夫がひとりでいると、近所の子供が訪ねてきたのだそうだ。「保育園に行ってるよ。」「ううん。おばちゃんいる？」アメリカ帰りの息子を子供の世界にとけこませようとする努力は、珍奇な結果を招いた。

たとえどんな素晴しい環境で育てられようと、家庭でどんなに生き生きしていようと、集団生活は子供が乗り越えねばならない壁を提示してくれる。十人の子供に十様の壁を。その中で、子供達は世界は自分を中心にしては回転していないことを少しずつ知っていく。

コペルニクスが地動説をとなえた時のように、これは衝撃的な出来ごとである。我が子を中心に世界がまわっていないことを、親も認めていく必要があるからだ。しばしば、〝子供を守る〟というスローガンが、天動説を堅持することにすり変ってしまう。幼児を見守る先生方は、我が子を中心に世界がまわってほしいという親の願いと闘う毎日なのではないだろうか？　だが、地動説が正しいのである。あがきながら、現実を認め・現実を愛し、現実を改善することに喜びを感じる芽は育つ。その芽を、育ててほしい。家庭では決して得られない不思議な力を持つ場が、集団教育の場なのだから。

トンチンカンなインテリママの努力で子供を苦労させてしまったが、三年生頃になると少年らしい輝きを見せ始めた。ママのもとで得た良さも見えはじめた。一方、私は情ない気持で過すなかで、たくさんのお母さん達と触れ合うことができた。それは得がたい経験であった。

★ほゝえみをひき出す可愛いい時

「ナカムラ行ってくる。」インチキ菓子を売っている駄菓子屋へお兄ちゃんが駆け出した。「アタチもナカムラさん行ってくる。」二才の妹が後を追った。そして、姿を消してしまった。あんな驚いたことはない。動転して捜しまわった結果、おむかいにいた。おむかいは中村さんである。

子供時代、フロッキーという名前の犬を飼っていた。犬を散歩させていると、ススム君がこう云った。「なおこお姉ちゃん。この犬、コロッケーやな。」

幼児は、存在そのものがユーモラスで可愛い。接する人々にパッと明るさをともす。これは、知恵遅れの子供でも、自閉症の子供でも、心を閉ざした子供でも変りはない。口を固く閉ざした子供を相手に、私は大笑いしたことがある。子供を相手にゲラゲラ笑っていると、彼等は調子づいて生き生きする。単純化すると、子供を相手に笑っているだけで、子供は伸びていく。自分の存在がおとなに喜びを与えていることを実感して、成長へのはずみがつくのだ。だから、表情の乏しいまじめそうな教師を見かけると心配になる。もしも、子供と接しても心の底に笑いが起こらないようなら、カウンセリングを受けるのがいいかも知れない。

つい先日、哲学に深くひかれて現実を歩むことが空しくなってしまった青年と語った。私には、人間の幸せを追求する哲学が現実逃避に役立っている謎がなかなか解けなかった。だが、高校時代に両親の不和を眺めながら、「人間とは」「自分が今ある意味とは」を考えて哲学にひかれ始めたと聞いてハッとした。自己の存在が両親の喜びと笑いを引き起こしてこなかった長い間の悲しみを思った。

幼児達は、すでに様々の問題をかかえて教師のもとにやってくる。頭がいたくなるような子供もまじっている。けれども、幼児の段階ではどの子も一様にユーモラスで可愛い。その存在を喜ばしく感じさせる力を失ってはいない。その力が消失しないよう大切にし、出来ることなら大きく育て、学童期へ手渡してやりたい。

★悠久の時間をもつのんびりした時代

息子が五年生の時である。「お母さん、僕は生れてから今まで一〇〇年生きたような気がする。そして、大人になるまで一〇〇年あるような気がする。大人になってから死ぬまでもう一〇〇年あるように思う。」そろそろ塾に通う子供が増えはじめる年齢になっても、彼はおっとりかまえていた。

彼の理論をかりると、幼児が大人になるには、ほゞ二〇〇年という悠久の時を持つことになる、ところが、私達の時間が何と短いことか！「最近の私は一年さえもが短くなってきた。ここに、大人と子供の大きな断絶が生じる。私達のあわただしい時間を子供に押しつけて、彼らを心理的にみた時間で一〇〇年間も追いまわし、精神的にへとへとなティーン・エイジャーにしてしまうのだ。これに対しては教師も責任がある。

きちんとトイレに行かせて下さい／持物を整理できない子供がいます／忘れ物が多いです／一日一時間は家庭学習させましょう。何とたくさんの注文を聞いたことか。もちろんそれは小学生に対してであるが、それを身につけた小学生にしようとすると幼児教育の場も忙しくなってくる。教師の発言を正面から受けとめる誠実な母親に育てられた子供は、一様に萎縮している。若いお母さん達の誠実さを、もっと違った形で花開かせることだってできるのに！

一億総神経症か反抗児にしてしまうような我々の基本姿勢に対して、私の中で何かが「違う！違う！」と叫んでいた。当時よく冗談をとばしていた。「幼稚園に入園してしまえば、子供がおしっこをしくじろうが、帰りたいと泣こうが、もうこっちのものよ。」これを聞いたお母さん達のホッとした表情は、本当にやわらかで美しかった。「先生には悪いけど、忘れものしないようになんて心配しないの。恥しい思いをすることは薬だと思うの。」朝長々とトイレに入り、神経質そうな兆をみせた息子や娘には、「本当は、行きたいときに行くのがいいのよ。無理しなさんな、そのために学校にはトイレがいっぱい

あるのよ」と励ました。

現在、おならのことが気になったり、腸の工合が気になったり、様々の症状で苦しんでいる若者が多い。神さまが作ったとしか云えない様なすばらしい体を与えられているのに、自分の体を信頼できず、意志の力でコントロールしようとして、不安定にゆらいでいるのだ。

成長しつつある自分を感じることは楽しいことである。生命を守り育てることは喜びに満ちた光栄ある仕事である。悠久の時を、私達も楽しみたい。

★自分の小ささを知る時

中学生になった息子と何度語りあった事だろう。「荒れている中学生の未来を、明るくする手だてはないか？」を。公立中学で学ぶ彼は、多発する問題のまっただ中にいる。中学生の口からしか聞けない生々しい話をいっぱい語ってくれる。パーマをかけ真赤なジャンパーを着た連中と釣に行き、時には母子家庭の級友の新聞配達を手伝う息子。模擬試験の前日は、勉強をつき合ったりもする。「親がカウンセラーなんかしてると似てくんのよ」と云われては、苦笑するしかない。「お母さん、どうしようもないな。そういうヤツは、自分は親よりえらい、進んでいると思っているな。先生を完全に馬鹿にしてるな。」

現在の問題をまぜ合せてくる問題点は『肥満した自我』を持つおびただしい数の子供達である。小遣いを節約している父、内職をして努力する母の心を思いやれない子供達。我々は、子供をいつくしみながら犯した誤ちを改善していかねばならない。その手がかりは、やっぱり幼児期にある。

幼児は、親の保護なしには生きていけない。過保護にさえしなければ、自分の頼りなさをいやというほど思い知る毎日である。パパの手の大きさにホッとし、ママの膝のぬくもりに安堵する。先生が言ってくれた一言が、飛び上るほど嬉しい。これぬきに、健全な自我の形成はないのである。

人の助けを必要とするチッポケな自分。これを身にし

みて知るところから、人格形成が始まるのである。

★ドンキホーテー的意欲を得る時

まだティーンエイジャーなのに、深く挫折した子供、彼らと出会ったショックは、一生、私の心に傷跡を残すだろう。その経験から、いま大人が子供に与えてやらねばならないものは、生へのパッションではないかと考えている。ドンキホーテーのようなあの意欲だ。

石油資源は無尽蔵等と教えられた知識は、役立たなかった。この国で身につけた常識の半分は、アメリカでは役立たなかった。あどけない表情を浮べた子供達は、我々以上に変化の波をくぐっていかねばならない。戦争せずにもめごとに決着をつけるという難題も克服していかねばならない。幾度傷つき矢折れることだろう。だけれど、ドンキホーテーのような意欲で乗り越えてもらいたい。そのためのエネルギーを、今からためていってほしい。

「お母さん、気持よかったわー。全員がシーンとして試験受けてた。悪いヤツも、高校には行きたいんやなー。」中学三年の中間試験を迎えて、子供達はひきしまってきたらしい。悪いと言われる中学生が、ひとり残らず未来を捨てていないことを知って、本当に嬉しかった。〝子供の人生は、子供自身の手に渡してやろう〟こう考えて親としての歩みを進めてきたが、社会批判しだした彼に、受験体制に背を向けるのではないかと恐れていた。だがそれは危惧にすぎなかった。息子は、仲間達と足並をそろえて、日本に住むかぎり当分出合わねばならない難題に向いつつある。

五年生の娘は、楽しい計画で忙しい。ただし、昨日ノートをのぞいたら、計算練習二〇題のうち、まるがついているのはたった五題だった。それでも、友達と飛び歩く意欲は何ものにもかえがたい。子供時代を思い出す。小学生は遊びほうけていたことを。今の子供ほどかしこくなかったが、生への意欲に充たされていたことを。

さて、あなたの園は、小さなドンキホーテーで満ちていますか？

私の保育

川口順子

「保育とは何て難しい仕事だろう。」それが率直な今の私の心境である。保育者になって十三年目。一年一年、これでいいのだろうかと自問しながら仕事をしてきたつもりだが、やればやるほど、分らない事が増え、難かしさが出てくる。子どもが見えない。発達とは。そのポイントをどう押えれば良いのか。指導のすじ道を立てるには。と、いつもまるごとの悩みを抱えながらやってきている。

幸い、園の職員集団の中に、同じ基盤に立って話し合いや研究ができる関係ができていることもあって、悩みは一人ではない。昨年度は、何年間か積み上げてきた実践を整理しようと、園全体で取り組み、年間指導計画を作成してみた。そして今年は、その計画を再度検討しながら、保育を、あらためて捉えなおす年になったのである。が、「プラン」と実践の間は、考えながら保育を進めようとすると、より複雑になってくる。プランがいく

らうまく組み立ててあっても、保育は、その日、その日の勝負なのである。「一日一日、良い保育をしよう。」それが今年度の課題になった。一体、何から学びなおそうか、とあせった気持で母校であるお茶の水女子大学の附属幼稚園に出かけて行った。

何年かぶりに訪れた附属幼稚園、変わらない環境。何となく「帰って来た」という気分で、堀合先生の保育を一日追ってみる。一人一人をおさえ、無駄のない先生の保育を見て、その一コマ一コマの動きの大切さがやっと分りかけてきた。やはり、良い保育を見る事が一番近道である。自由形態の中で、子どもに対応して動く指導の難かしさ。この事位、個人差の出る事はない。子どもの要求が分って、教師の意図をうまく融合させていく。計画を計算しながら、よりベターに達成させていく。まさに創造である。

十一月も末、私の受け持っている四十人の年少児(四歳)もだいぶ個々の力を出して、友達とつながりを持ちながら遊びを進められるようになって来た。今の時期、何を育てる事が大切なのかを明らかにするために、遊びや友達とのつながり方、生活面での問題点や到達点などを、自由形態での状態をベースにしながら洗い出してみる。四歳時の二学期の目標として「思っていることを言葉で言い、自分を十分出しながら友達とかかわりを持って遊べるようになる」と指導計画にあるが、友達とのかかわりは、こちらが意図的に達成させようとしなくても、集団の楽しさを感じるようになっていく中で、けっこう方向が出て来ているのではないか。むしろ、個々の力をしっかり身につけさせることを今の目標としてすえていかなくてはいけない。年長児の実態からも洗いなおし、今の時期のポイントをそのように押えてみた。

例年だと、年少組も二学期末、クラスでまとまった活動に取り組めそうにみえ、年長の動きに誘発されて、ダンボールで大きな乗り物を作ったり、お家づくりをしている時期だが、視点を変えることで、活動の選択も変っ

てくる。そこで、幼児の要求として出ている友達とのかかわりを持ちながら遊ぶ遊びの中で、個の力を見るように配慮し、運動あそびや、指先の作業を主とした製作などを自由あそびの中に入れ込んでいくようにしてみた。例えば運動あそびでは、半円形の一本線ドンを、毎日くりかえし、教師がついて組んでいった。この遊びの中で、ジャンケンの理解を確かにしたり、自分の前の子が負けたら、とっさに飛び出していこうとする瞬発力を育てたいと思った。

「先生　ドン、ジャンケンポイやろう。」という声が出てくるようになったころ、今まで自分の殻に入りこみがちだった数人の男児が、毎日入って来て、何十分も続けて、遊びを楽しむようになっていった。彼らは、園生活のスタートの時点で、それぞれとまどいの多かった子どもたちである。そのうちの一人、S男は、入園当初、ロッカーの中に入りこみ、他の子の遊びをながめていた。何をやるにも一歩ずつ他児より遅く、朝ボサッとした顔で、登園して来て、遊びに入っていくまでにすませなくてはならないうがいやタオルかけを、教師に指摘されながらようやくすませ、自分の遊びを見つけて入っていく頃には、回りは佳境に入っている、というような子であった。が、この遊びの中では、目を輝かせ、しだいに自分がジャンケンを早く判断できるようになるのを喜び、前の子の動きをとらえて動こうとするようになったのである。何よりも遊びへの持続力がこんなにあったのかと驚かされた。遊びでの姿と平行して、生活面でも自分からやろうとする力がみえるようになったのもこの頃であった。

十二月に入り、年長組が一台六人乗りの車づくりに取り組んで約半月がたった。木工での協同製作、クラスで一台、みんなで乗れるのりものを作ろうと、のこぎりやかなづちを使い作った車が出来上った。年長の子どもたちは、一人一人「やった」という顔で車を動かしはじめた。役割がでてきて、押すことのうまい子、ストップのかけ方のうまい子など、それぞれの持ち味を生かして、ごっこが始った。「先生、乗ってるよ。ぼくたちにも乗

せてくれるかな。」「そうだね、明日、乗せてくれるかもしれないよ。そうだ、お金入れるハンドバック作っておこうか。」と提案する。「「よし、この活動を利用してホッチキスをとめる力を見ておこう」と計画を組む。

さっそく、画用紙を半分に折って回りをホッチキスで止めるだけの簡単なハンドバッグつくりが始まる。「先生、ホッチキスのはりがなくなった」「リボンどこ」「ことめて、できない」と作業が進む。「ハーイ、ハーイ、まっててね」といいながら動き回る。このような活動では、前日、子どもの動きを予想して、あらかじめ環境設定しておくことが、成功のポイントになる。ホッチキスはハリが入ってすぐ使えるか、何人が一度に使えるように用意しておけば良いか、リボンは使いやすい長さに切ってあるか、サインペンやマジックの数は、穴をあけるパンチの数は、と使うものを整え、作業しやすい机の体型を組んでおく。ところが、なかなか予測通りにいかないことが多いのだが。環境設定の重要さもあらためて感じている今日この頃である。

そんな具合にハンドバッグが出来て、いよいよ乗りものごっこが始まる。ウルトラマンごっこをやっていた男児も、ままごとをしていた女児も「あ、動いてるよ」と園庭にとび出して行く。年長組の子ども達が役割について、遊びのしくみが動きだす。「銀行」のかんばんの中にお金をくれる人がすわっている。巧技台の中にもぐって中からキップを出す「自動券売機」の係。駅員たちも帽子をかぶり、それぞれの役割を意識して目を輝かせている。年少組の子たちは、案内係のお姉さんに手をひかれて待望の電車にのれるわけだ。ところが、たのしそうで、どの子もとびつきそうなごっこの中に入って行かない子が、何人か室の中にのこっている。乗りものごっこ一日目の帰り、「今日、電車にのってきたよ。楽しかったよ。」と話す中でも、自分は自分、という顔。「明日乗ってみようか」と声をかけてもうかぬ顔。次の日、その中の一人、N子をさそって、「いっしょに乗って来ようか。」と手をつなぐ。「ね、Nちゃん、ここ銀行なんだって、お金ちょうだいって言ってみるからね」と私の方か

ら必要な言葉を言い、彼女と行動をとってみる。

私もハンドバッグをかけ、頭に紙のヘアーバンドをして気分を出す。二回ほど、それを繰り返し、彼女はホッとしたような顔で室に入っていった。なるほど、ごっこに必要な言葉、「これ下さい」と言うことや、キップを切ってもらうなど遊びの順序を通過する事が、今の時期の年少の子にとって、けっこう難かしい課題なのだという事があらためてわかった。次の日、N子は、いつにもなく明るい顔でやって来た。「先生、今日もいっしょに乗ろう、私、先生がいっしょじゃなきゃいやだもん、ねー」。彼女が私にこんなに強く、明るく自分の要求を出してくるのは始めてだった。前日、彼女にベターっと付いて動いた事が彼女を開かせたのだ。三人兄弟の一番上で母親も若く、口数も少ない。狭い家の中に姑をかかえ、彼女は「外へいって遊んどいで」と、いつも一人で行動することになる。何となくさみしげな彼女が、教師のこんな小さな働きかけで積極性をみせた。そして、その日は、「Nちゃん、先生の分もキップもらって」と、彼女に必要な言葉を言わせながら、一回、いっしょに乗って来た。その後、彼女は、同じようなタイプのK子をさそって、一日中、乗りものごっこに参加していた。

行きつく先は、やはり、一人一人の子どもだ。四〇人、一人一人がいつも、教師に様々な思いで、要求を持っている。子どもを見つめ、子どもの中から、今教師としてどう動くことが必要かを見つけだす。教師が指導しようと前を向いて引っぱらなくても、子どもは必らず教師に方向を示してくれるものだ。一人一人の成長が保証できるような教育をしたい。いや、しなくてはならない。一日のうちの一コマ、必らずつかんでやる必要のある子、年間のある時期、集中的に見ていてやる必要のある子、と、それぞれだ。あの子は、あの時、見すえたことでこう変って来ている、とどの子にも思える、そんな教師でありたいと思う。

（世田谷区立八幡山幼稚園）

『赤ちゃんの愛欠病』

セルマ・フレイバーグ著
田口恒夫訳

日本放送出版協会

最近、新生児や乳幼児に関して、心理学や医学等、多方面から光が当てられるようになり、画期的研究の成果を、テレビや書物を通じて、家庭にいながらにして知ることができる。しかし、新前の母親である私自身の体験から顧みると、それらの最先端の学問的真実と、現実に、一歳半になる瑞々しくなよやかな娘に対して、私が実践してきたこと（即ち、近代的施設の病院での出産、少しではあるが仕事を続けながらの核家族の中での育児との間には、深い溝があることを身を持って感じているこの頃である。

そんな折、私は、ミシガン大学の児童精神医学者セルマ・フレイバーグが知識として〝知られていること〟と、現実に幼い子どもに対して今〝行なわれていること〟との間に、一本の橋を掛けることができればという願いで綴った一冊の本を手にすることができ、一つの指針を得ることができたので紹介したいと思う。

著者は前書きで声高に言う。「子どもは自分の人生における最初の相手の人、すなわち両親とのかかわりを通して、愛することを学ぶ。この奇跡的な出来事は、赤ちゃんに対する愛の〝贈物〟だと考えることもできる。しかし赤ちゃんにとってはこれはひとつの権利であり、すべての子どもの生得権ともみるべきものである。〝マザーリング〟……まさにこれが、赤ちゃんの愛する心、信頼する心、生涯にわたって愛する相手とつながる心をはぐくんでいるのである」と。

しかし、赤ちゃんの生得権である。人生最初の二年における母子一対一愛着関係が、「不幸な出来事、災難、あるいはまわりの人々の無関心など」の為に、侵されると、「その子は将来とも、心から相手の人を愛する能力や人間社会を愛する能力の減退ないし枯渇した人になる」これを著者は、この本の題名でもある「愛欠病」と名付ける。愛欠病は、厳密に言えば、神経症とも精神病とも異り、自我の形成期（人生最初の十八ヶ月）に起った、自我の構造的な弱さないし形成異常である。

愛欠病の特徴は、「人間的愛着の形成ができないということである。そういう人に個人的に会ってみると、なんとなくあいだに空間があり、へだたりがあり、〝つながらない〟という印象を受ける」

又、感情面での貧困さ、知能や学習能力の低下、対人的社会的行動の障害、冷酷な人柄等の特長をもつという。

困ったことに、現在、愛欠病の子どもの数が増加の傾向にある。これらの愛欠病の人達の問題が切っ掛けとなり、研究者達が、初めて、「赤ちゃんが将来ゆるぎない人間愛を持った人間家族の一員に育ってゆく為の基礎づくりとして、普通の赤ちゃんとその親とのあいだでは、いったい何が行われているのだろうか」という素朴な疑問の解明が始まり、過去40年間にその答えが出て来た。今まで当たり前のことである為に注目されずにいた「愛のコトバ(赤ちゃんと親との間で生後最初の一時間以内に始まり、その後の二年間でどんどん手の込んだものになっていく、親子の〝対話〟)、目のコトバ、ほほ笑みのコトバ、欲求のコトバの他、身ぶりや信号」も解読可能になり、乳児期の愛の絆の発達過程が明らかになった。その結果、様々の専門領域の学者の一致した意見として、「永続的な愛や献身的な愛などという人間的な性質は、人生最初の二年間に作られるものであり、その時期を失ってしまっては、もう取り返しがつかない」という冷厳な事実に突き当たったという。

内容構成は一章「赤ちゃんの生得権」二章「人を結ぶ絆」では、乳児期における人間的愛着心の発達過程が、発達心理学的視点の他に、民族学的視点(地理的、社会的に隔絶されている辺境の三種族間に共通して見られる。自宅出産、母乳等の育児法と、出産後すぐに始まる母子の絆が形成される〝敏感期〟との関係の考察)、生物学的視点(コンラード・ローレンツの研究を参考に、愛と攻撃性の相互関係の検討)という独特の視座を盛り込んで探求されてゆく。三章「親権裁判」四章「託児産業」では、前章の知見を踏まえて、米国の子ども及び家族に関係した社会機構の中で現在実践されていることを顧みた時、いかに子どもの愛される権利が犯されているかが、ユーモアたっぷりの中にも辛辣に照らし出されてゆく。終章「子どもを守れ」は、昔から部族の中で、子ども達を皆で守り育ててきたように「人間的愛着を第一義として」赤ちゃんの生得権を、私達すべてが守り保障するような文化と社会の再建の必要性が述べられ締めくくられる。

今日の日本において、ベビーホテルでの悲報ひとつ取ってみても、やはり、物言わぬ赤ちゃんの、可愛がられる権利が真先に侵されようとしている。そのうえ愛欠病は、著者の多様な視座からの展開で明らかにされたように、単に赤ちゃん丈の問題に留まらず、子どもと大人の織り成す様々の人間的問題と、深い基の部分で繋がっていることを忘れてはなるまい。この本を子どもに関心のある人だけでなく広い分野の方々に読んで頂き、乳幼児期の子ども達が充分な愛を育めるような後楯となってもらいたいと思う。

(美谷島いく子)

日本における最初の私立幼稚園とその背景 (3)

――和歌山県の稚児保育所と桜井女学校附属幼稚園――

小林恵子

明治十二年、東京の芝で近藤浜が近藤幼稚園を創立したという石井研堂の説は裏づけとなる資料が無く誤りであろうということを二回にわたって述べた。

さて、今回は明治十二年の文部省年報に掲載されている二つの保育施設、和歌山県の稚児保育所と桜井女学校附属幼稚園について考察したい。

(A) 和歌山県の稚児保育所

明治十二年の文部省年報にはこの保育施設について次のように記されている。

「其私立ニ係ル者ハ和歌山県ニ稚児保育所ノ一箇アリテ現ニ幼児男六名女七名ヲ保育スト雖モ未ダ其方法等ヲ詳スル事能ハズ其他一二ノ地方ニ於テ已ニ幼稚園設置ノ規画ヲナスモノアリト雖モ本年ニ於テハ未ダ其成績ヲ観ルニ至ラズ」

この稚児保育所とは誰がどのような目的や方法で始めたのだろうか、保育所というが実際はどうだったのか。

まず、和歌山県の学校教育課に直接問いあわせたとこ

ろ係の丸山御代治さんから「ご依頼のありました件について各方面へ連絡をとりつけているところですが今の段階では適当な資料がございません」との手紙を頂戴した。

そこで次には、この疑問に少しでも関係のありそうな資料を調べてみることにしたが、今のところ稚児保育所についての資料が無く確かなことが何も言えないのが現状である。「日本幼稚園史」にも「和歌山県明治十二年に於て幼児保育所を設けたが永続を見ずして閉鎖した。」とある。[註(1)] この幼児保育所というのは文部省年報に記載されている稚児保育所と同じものであろう。いったい和歌山県のどこで誰が始めたのであろうか。ふしぎなことに明治十二年の和歌山県年報をみると、この稚児保育所のことが全く記載されていないのである。[註(2)] しかし同年の学事統計表をずっと見ていくと和歌山県のところで私立幼稚園数が一園と数が記載され、さらに私立幼稚園保母は一人で幼児数は男が六名、女が七名とある。これは和歌山県の稚児保育所を私立幼稚園として取扱って学事統計表に記入したことが明らかであり、明治十二年の一園というのはこの保育所のことを指していると考えて間違いない。

こゝで疑問となるのは、和歌山県の稚児保育所を幼稚

明治十二年の学事統計表

	東京	大阪	和歌山	鹿児島	総計
幼稚園 官立	一				一
幼稚園 公立		一		一	二
幼稚園 私立			一		一
官立幼稚園保姆	三				三
公立幼稚園保姆		二		一	三
私立幼稚園保姆			一		一
官立幼稚園児 男	五四				五四
官立幼稚園児 女	四五				四五
公立幼稚園児 男		三五		三七	七二
公立幼稚園児 女		二〇		四九	六九
私立幼稚園児 男			六		六
私立幼稚園児 女			七		七

（明治12年の学事統計表による，文部省 第七年報 掲載）

園として取扱ってよいかという点である。文部省年報で明確に「稚児保育所」と記載してあるものを「幼稚園」として取扱うことは資料の裏づけのない限り納得することができない。恐らくこれは和歌山県からの報告によったものと考えるが、和歌山県の年報に全く記載されていないところをみると一体どこが稚児保育所のことを報告したのであろうか。和歌山県で報告されている関連事項はたゞ明治十三年一月二十日付で公立学校幼稚園および私立学校幼稚園に関する教育規則が制定されたことである。[註(3)] しかし教育規則が制定されたからといって幼稚園があったということにはつながらない。明治期は欧米の教育制度にみならって実体はなくても規則がいち早く作成された時期であり、日本の近代化は欧米をモデルとして規則が先行して実体が生れるのを待つというふうであったからである。したがって、この稚児保育所の実態が明らかにされないかぎりはこの保育所を日本で最初の私立幼稚園という説には、私としては賛成しきれないのである。また保育所と明記したものを幼稚園として扱うとすれば、それ以前にあった幾つかの名称の異なる保育施設の検討も当然なされなければならないのではなかろうか。たしかに、この時期は幼稚園とか保育所といってもその区別は明確でなく混沌としていたわけで施設の名称に余りこだわってはならないというのはもっともなことである。しかし、そうかといって資料の裏づけもないものを最初の私立幼稚園とすることには問題があると考えられる。また稚児保育所と明記したものを幼稚園とするに当っては幼稚園の概念が問題とされよう。幼稚園はフレーベルが創始した Kindergarten が日本に移植されることによって始められた保育施設であると考えてよい。したがって明治になって日本が西洋との接触を始めることにおいて導入された幼児のための教育施設であると考えてよいであろう。

さて、次にこの問題に多少なりとも関連した資料をあげておきたい。「日本幼児保育史」第一巻に「和歌山幼稚園」と題して「明治十三年五月、和歌山市に私立の和歌山幼稚園が創立されたが、長続きしなかったように思

われる。この幼稚園は、和歌山女学校の教員兼校長であった榎本常が設立したものであるが、園について詳しいことはわからない。」とある。[註(4)] 榎本常については「明治保育文献集」別巻[註(5)]および「幼児保育学辞典」[註(6)]で簡単な履歴を私が書いているので多少なりとも参考にして頂ければと思うが、さきの稚児保育所と一体どのような関係があったのか明らかでない。

榎本常は安政二年（一八五五）和歌山県士族の生まれで和歌山県師範学校に学び小学校教師を勤めた。明治八年、東京女子師範学校に「読書教員」として招かれたが自分の学問の足りなさを知って教員から生徒に転じ、同十二年七月、同校小学師範科（二回生）を卒業した。向学心の強い努力家であったと考えられる。「読書教員」として招かれた人の中には豊田芙雄がおり、また同校舎長として近藤浜がいた。豊田と近藤は翌年、附属幼稚園が創設されるに当って松野クララと共に保姆として活躍するのであるがここで考えられることは和歌山で小学校教師を勤めたことのある榎本が日本で最初の東京女子師範学校附属幼稚園を見て少なからず刺激を受けたのではないかということである。同僚であった豊田芙雄が保姆として活躍している姿にも啓発されたのではあるまいか。

また、この学校の摂理であった中村正直の影響が大きかったのではないかと推察される。中村は附属幼稚園の創設に最も貢献した人でフレーベルの幼児教育思想を根底から把え移植しようとした教育家、儒者で同時にすぐれた女子教育家であった。榎本が小学師範科を卒業しながら卒業後は小学校教師としてでなく女子教育と幼児教育に情熱を傾けたのもこうした人々の影響によるものと考えられる。

明治十二年七月に卒業し和歌山に帰った榎本は郷里で和歌山女学校を創立し教員兼校長として女子教育を始め、翌十三年五月に私立和歌山幼稚園を設置したというのであるが、このあたりが明らかではない。これが稚児保育所と同じなのか、資料の裏づけがないかぎり正確なことは何とも云えないのである。明らかなことは榎本が

明治十七年、岡山県師範学校附属幼稚園が創設されるに当って最初の保姆として女子科教師として招聘されたことである。「岡山県保育史」にも「十二年から十七年までの間、榎本は和歌山県で女学校の教師をし傍ら幼稚園の設立の仕事などにも従事していた。榎本の和歌山での幼稚園経営の経歴が買われたことも当然であろうが、東京女子師範の数少ない卒業生の一人をわざわざ岡山に呼んできたという点に、幼稚園に対する並々ならぬ熱意がうかがわれる[註(7)]。」と記されている。「和歌山での幼稚園経営」というのが稚児保育所であるとすれば、これは幼稚園を意図として始められフレーベルの保育方法で行なわれたものと推察される。しかし稚児保育所は明治十三年には文部省年報および学事統計表からはずされ記入されていないところをみると、榎本が十二年七月に東京女子師範学校を卒業し和歌山ですぐに稚児保育所を開き半年ばかりでやめたのか、幼稚園への情熱をもっていた榎本がなぜ稚児保育所という名称を用いたのか、財政的な問題ですぐにやめたのかなどの疑問がいろいろと考えられるわけで今のところ資料がなく不詳であるとしか云うことができないのである。

(C) 明治十二年の年報に記されている桜井女学校附属幼稚園

公的な資料がかなり揃っているのが桜井女学校附属幼稚園である。

明治十二年の文部省年報の「東京府」のところに「幼稚園ハ府下麴町区ニ愛媛県桜井ちか子ノ設立スルモノ一箇アリ」とある。この年報だけをみると、この幼稚園は十二年に創立されたかのように思われる。文部省初等教育課に教育統計の表で明治十二年に一園とあるのはどこの幼稚園であろうかと尋ねると、統計は文部省年報にもとづいているという返答を頂いた。筆者は文部省の教育統計で十二年に一園とあるのは年報に記されている桜井女学校附属幼稚園のことではないかと考えてみたこともあった。しかし、園児数をよく調べると十二年の男六名女七名は稚児保育所のことであることにほぼ間違いな

い。また桜井女学校附属幼稚園の創立が十二年でなく十三年四月であることは次にかゝげる(1)から(5)の資料でも明らかであると考えられる。

(1)東京都公文書館にある開業届

東京都公文書館には明治十三年四月二十日の日付で桜井女学校附属幼稚園の開業御届が次のように残されている。[註(8)] また幼稚園規則は写真として「東京の幼稚園」の書にも掲載されているので貴重な資料としてこゝでもあげておきたい。[註(9)]

幼稚園開業御届

一　園名　桜井女学校附属幼稚園

一　位置　麹町区中六番町五拾四番地

右別紙規則書之通四月一日ヨリ開業仕候間此段御届申上候也

明治十三年四月二十日

麹町区中六番町五拾四番地

桜　井　ち　か　㊞

東京府知事　松田道之殿

右届出ニ付奥印候也

明治十三年四月二十日

麹町区長　矢部常行　㊞

この書類には、このあと幼稚園規則と保育科目が記載されており最後に明治十三年四月とある。

(2)明治十二年の文部省年報について

明治十二年のことを記載した文部省第七年報をみると、東京府年報が提出された日付は次にみるように十三年六月十九日となっている。[註(10)]

東京府年報

明治十二年本府学事年報并に明治十一年伊豆七島学事年報左之通り調査候条致進達候也

東京府知事　松田道之

明治十三年六月十九日

文部卿輔　河野敏鎌殿代理

文部少輔　九鬼隆一殿

これは原則としては府県年報は歴年によるものでその年の一月から十二月までのことを扱っているのであるが、当時はまだ形式がとゝのっておらず実際には書類を提出した六月まで、すなわち翌年一月から六月までのことが含まれており、したがって桜井女学校附属幼稚園が創立された十三年四月が十二年の年報に記載されてしまったものと考えられる。このことは十三年以降の文部省年報によって明らかにされている。

(3)明治十三年、十四年の文部省年報

明治十三年の文部省年報に「本年ニ至リ大阪府下ニ公立愛珠幼稚園及ヒ東京府下ニ私立桜井学校附属幼稚園ノ二箇ヲ開設セリ」とあり、更に十四年の年報には「其私立ニ係ルモノハ麹町区中六番町ニアル桜井チカノ設置スルモノ是ナリ此ノ園ハ明治十三年四月一日ノ創始ニシテ保育法ハ物品科、美麗科、知識科、及ヒ五十音、計数、唱歌、単語図、説話、体操ナリ保姆一名幼児十名内男四名女六名ニシテ前年ノ実況ト大異ナキニ似タリ」とある。

(傍点は筆者による)

以上でもわかるように十三年、十四年の文部省年報に桜井女学校附属幼稚園の創立が十三年であることが明記されており、十二年でないことが理解されよう。

(4)私立幼稚園の園児数（明治十二―十四年）

私立幼稚園の園児数（Ⅰ）

年度	園数			在園児数		
	国立	公立	私立	国立	公立	私立
明治12	1	2	1	99	141	13
13	1	3	1	105	311	10
14	1	5	1	98	318	10

（文部省，教育統計）

私立幼稚園の園児数（Ⅱ）

年度	在園児数		
	男	女	計
明治13	6	4	10
14	4	6	10

（東京府統計書調）

教育統計に記載されている私立幼稚園の園児数を明治十二年から十三年、十四年とあげてみたい。

この表でみると私立幼稚園は明治十二年は一園で園児数は十三名とあり、十四年と十五年も同じく一園で両年とも十名となっている。また、これを東京府統計書で調べてみると表(II)のように明治十三年の十名は男六名、女四名で、十四年は同数であるが男女の比が反対となり男四名、女六名となっている。この園児数は先に述べた明治十四年の文部省年報「幼児十名内男四名女六名ニシテ前年ノ実況ト大異ナキニ似タリ」の記事と一致するものであり、十三年と十四年は桜井女学校附属幼稚園の園児数を指していることが明らかである。そして、十二年の十三名は男六名女七名という稚児保育所の園児数とも一致するもので、十二年は和歌山の稚児保育所のことを、十三年と十四年は桜井女学校附属幼稚園のことを指していると考えて間違いないと思われる。

(5) 桜井女学校附属幼稚園の最初の保姆

桜井女学校附属幼稚園が十二年でなく十三年四月の創立であったという裏づけは次のことからも裏づけることができる。

この幼稚園の母体となった桜井女学校はミッション資金によらぬキリスト教主義の女学校として明治九年、東京の麹町に設立され、創立者、桜井ちかは牧師（桜井昭悳）の妻で日本の女子教育のため独力で始めた女学校であった。（この学校は後に新栄女学校と合併し女子学院となり現在に至っている。）附属幼稚園は桜井女学校を母体として設立されたが最初の保姆となった箕輪鶴（みわつる）（のち馬屋原と改姓）は東京女子師範小学師範科を明治十三年二月に卒業し、四月から勤めている。箕輪の教師履歴は次の通りで東京都公文書館に保存されている。[註(11)]

教師履歴

千葉県士族箕輪邦厚長女

東京府下深川区亀戸村三百五十四番地住

箕　輪　鶴

万延元年　月　日生

明治八年十一月東京女子師範学校へ入校同十三年二月卒業候事

箕輪が東京女子師範小学師範科を明治十三年二月に卒業したことは現在のお茶の水女子大学の卒業者名簿によっても明らかで[註(12)]「日本キリスト教保育八十年史」八七頁に「箕輪つる、桜井女学校附属幼稚園の最初の保姆」として写真が掲載されている。[註(13)]「女子学院 八十年史」四二頁に「師範学校附属幼稚園保姆科第一回の卒業生を雇ひ」[註(14)]とあるのは間違いで箕輪は小学師範科第三回の卒業生であった。

以上の記述から桜井女学校附属幼稚園は明治十二年でなく十三年四月の創立であったことが明らかである。したがって和歌山の稚児保育所が幼稚園であったという確かな資料による裏づけがない限りは明治十三年の桜井女学校附属幼稚園が日本で最初の私立幼稚園であると考えて間違いないと思われる。すなわち全国で最初の私立幼稚園は明治十二年でなく十三年であってキリスト教主義の桜井女学校附属幼稚園から始まったと考えられるのである。次回からは、この幼稚園が設立されたいきさつについて考察してみたいと思う。

（国立音楽大学）

註

(1)倉橋惣三・新庄よしこ共著「日本幼稚園史」臨川書店 昭・五一 五四頁

(2)「文部省第七年報」文部省 宣文堂 昭・四一 二八八頁

(3)文部省「幼稚園教育百年史」ひかりのくに 昭・五四 八一二頁

(4)日本保育学会編「日本幼児保育史」第一巻 フレーベル館 昭・四三 一八二頁

(5)岡田正章監修「明治保育文献集」別巻日本らいぶらり 昭・五二 一八二～一八九頁

(6)村山貞雄監修「幼児保育学辞典」明治図書 昭・五五 九〇―九一頁

(7)岡山県保育史編集委員会「岡山県保育史」フレーベル館 昭・三九 三五頁

(8)明治十三年四月―六月私立学校書類
(9)「東京の幼稚園」東京都　都史紀要一四写真の最初の頁
(10)「文部省第七年報」（前掲書）三〇頁
(11)明治十三年一月―十二月学務課往復書類
(12)お茶の水女子大学桜蔭会卒業生名簿による、蓑輪ツルとある。
(13)「日本キリスト教保育八十年史」基督教保育連盟編　昭・四一　八七頁
(14)「女子学院八十年史」女子学院　昭・二六　四二頁

協力して頂いた施設および人
和歌山県学校教育課、東京都公文書館、国立教育研究所、文部省初等教育課、女子学院図書館、お茶の水女子大学桜蔭会、国立教育研究所　佐藤秀夫氏

クリスタル

連休に茨城の田舎へ行ったときにつかまえたといって、美しい玉虫を小箱に綿をしいて入れて、Uちゃんは大事そうにみなに見せている。「ワァきれい！　これ本物なの？」「ブローチみたい」などと感想の声が聞こえる。私も彼の宝物を見せてもらう。「素敵、きれいねェ」とその緑の黄金色に輝く天然の装いに見とれていると、後から四～五人の男の子たちが「なあに？」「見せて」と集まって来た。

Uは得意気に「これ、玉虫だよ」と言って見せてあげる。Hは目を丸くして「ワア、クルスタル！」続けてTもしみじみと「クリスタルだなあ！」私もつられて何だかその玉虫の羽はクリスタルな輝きのように見えたものだった。

（K）

子どもの気持の表現にふれるとき (1)

——水遊びを通して——

唐木久枝

はじめに

発達におくれのある子ども達の保育の現場にいると、同じ遊びを、毎日毎日、繰り返しやっていたり、一つの遊びに、長い間、熱中している子どもをよくみかけます。

そして、おとなは、つい、その子どものやっていることに目を向けて、「いつまでたっても同じことをやっている。」とか「繰り返し、繰り返しで進歩がない。」とか「くせにならないだろうか。」など、そのやっていることがらにとらわれがちです。

でも、ひとりひとりの子どもをよくみてみると、自分からやり出したことには、必ず、何か意味があるのです。特に、自分の気持をうまくおとなに伝えられなかったり、また、自分自身でも、気持がよくわからないでいる子どもの場合、遊びが、気持の表現であったり、遊びの中で、気持の整理をしていることをたびたび感じさせられます。

そして、その遊びは、子どもの発達の過程における一つの手段で、そのことにとらわれていたのは、むしろおとなであったことに気づかされるのです。

夏の終わり、子ども達も、そろそろ水遊びから遠ざかってゆく中、ひとりの男の子が、はだかん坊で、庭の外水道からとんでくる水しぶきを、全身でうけて、歓声をあげています。

何をしたらいいのかな？

Bは、当時、愛育養護学校の幼稚部、4歳児のひとりです。Bの一学期は、何かいろいろとやってはみるものの、これといって、しっかり取り組むものもみつからず、特定の保育者との関係ももてず、遊びこめずにいて、いっしょに遊ぼうとする保育者も、Bの動きがつかめず、どのようにかかわったらよいか戸惑ってしまう状態でした。

記録より

○何で遊んでいても、とても楽しそうという感じは見受けられない。たまに、保育者の手を自分からひくが、身体的接触は、あまり好まない様である。（5月1日）

○定まった遊びがなく、Bがとびまわっている時は、かかわりようがなく、こちらでBと遊ぼうと思っても、うまくかみ合わない。（5月17日）

○保育者が、くっついて行くと、するりするりと避けているようであるが、ついてこられるのが、うれしい様でもある。（6月11日）

これだ！　水だ

そして、二学期になりました。人との関係を丁寧に育てた方がよいだろうということでしばらくの間、私が、じっくりつきあうことになりました。Bは、一学期の終わり頃から熱中しはじめた水遊びを期待しているかのように、登園してくるようになりました。

記録より

○登園すると、すぐはだかになって、お弁当をもって、庭へとび出す。水たまりを足でバチャバチャと、けちらすように走りまわる。お弁当を食べ、水遊びをする。（9月20日）

Bは、登園すると、室のロッカーの所まで行き、そこ

ではだかになり、お弁当のはいったバックをもって庭にとび出します。庭の特定の場所へ行って、お弁当をひろげ、食べてしまいます。そして、一日中、はだかで、水遊びに熱中するという毎日です。これは、一学期の、取り組むものもみつからず、何かを探している状態で、気持もどこにむけてよいかわからないでいたことを考えると、登園してすぐお弁当を食べるのも、一日中、はだかで水遊びをするのも、Bが自分からやりはじめたことで、Bのみつけた、気持の表現の行為のように思われたのです。この頃のBの表情や動きには、常に緊張感が漂っていました。

ですから、表情にも、動きにも余裕がなく、もう一つ、自分を出しきれていない感じがありました。でも、水遊びをしている時のBは、とても積極的で、大きな声を出し、何かから解放されたように遊びます。私には、Bが水遊びを通して、より自由な、積極的な気持を経験しているように思えたのです。それで私は、お弁当も、水も、はだかもとめずに、Bの動きにまかせ、なるべくBといっしょにいようとしました。

記録より

○ロッカー所で服を脱ぐと、お弁当と私の手をもって、庭へとび出す。お弁当を、いつもの所におき、そのそばに私をすわらせ、お弁当を食べる。(10月11日)

Bは、私がいつもいっしょにいるのをすぐわかって、朝からしっかり手をひいて、庭の特定の場所にすわらせます。庭のちょっと草のはえた所に、お弁当と私をもってゆき、そこへ私をすわらせ、お弁当を食べるのです。お弁当を食べおえると、水遊びのはじまりです。Bの水遊びは、庭にできた水たまりを、足でバチャバチャけちらして走りまわることからはじまります。Bが水遊びをしている時は、夢中というか、一心不乱というか、おとなのとりつくしまがなく、こちらとしては、どのようにかかわったらよいかわからず、それこそ、手も足も口も出ないという感じです。ですから私は、Bに連れて行かれた場所から、たえずBを見守ります。Bは、水をとばして水しぶきのようにしてもらい、それを体全体でうけ

るのが好きで、それをしてもらいたい時には、私の手をひきます。でも、これは、だれでもよかったようです。Bの水遊びは、体全体で水を感じていると同時に、勢いよくとんでくる水に体をぶつけ、大きな声を出して、思いきり、気持をぶつけているようにも思えました。

Bは、ほとんどことばを話しません。そして、いやな時にも、あまり、相手に対して攻撃的なことをしてぶつかってゆくことをせず、どちらかというと、周囲の人(主におとな)にふりまわされ、自分の気持は、あまり伝えられずに過すことが多かったようです。ですから、Bのがむしゃらなお弁当の食べ方や、突進するような水の遊びが、人に対して、うまく表わせないBのいろいろな気持をむけているように思えたのです。

抱っこもしてほしいな

記録より

○午後も、ずっと、私に水しぶきをやらせる。ひと遊びすると、自分からやめる。私が体を拭いてあげると、そのまま抱っこをしてくる、顔を近づけあまえてくる。(10月11日)

はだかでとび出し、お弁当を食べ、思いきり水で遊ぶと、Bは、私のところへやってきて、ベッタリと抱っこをして、顔をすりよせてあまえてくるようになりました。その時のBは、安心した、おちついた、穏やかな表情をします。ただ、こういう関係が、いつでももてるというわけではなく、朝、出会ってから、おちつくまでには時間がかかります。その間のBの遊びが水で、私は、見守る役をするわけです。

記録より

○今日は、Bは、他の保育者と一日過ごした。〔私は他の子どもといっしょだった〕帰りぎわ、下駄箱のところで、さよならを言おうとするが、視線を合わせようとしない。(9月25日)

同じ場所にすわっているよう要求し、遊びが一段落つくと、ベッタリあまえてくる以外は、あまり、私に要求を出さないBでした。しかし、所定の場所にいるはずの

私が、他の子どもに手をひかれたりして、しばらく留守にしてしまったり、私がつきあえずに、他の保育者にまかせたりすると、その後、私の方から行っても視線をあわせなかったりして、抱っこをしてきてくれるような関係になるまで、かなり時間がかかりました。他の子どもと遊んでいたりする私の手をひきにくるというような積極的な行為が、まだまだできないBにとって、視線を合わせないというのは唯一のBの気持の表現であったのでしょう。Bにとっては、同じ場所から、たえず自分のことを見守ってくれる人のいることが、とても大切なことだったようです。そして、その人が確実に、自分に気持をむけてくれることがわかると、自分も、安心して、相手の中にとびこんでゆけるのではないでしょうか。

Bには、二つ年下の弟がいます。お母さんは弟が生まれるまでは仕事をしていて、その間、Bの世話は、おばあさんがしていました。そして、弟が生まれてからは、お母さんは家にいましたが、弟がお母さん、Bは、お父さんかおばあさんという組み合わせが多く、外出する時も、Bは常にお父さんといっしょであったようです。ですから、お母さんに抱っこをされるということは、ほとんどない生活だったようです。でも、ほんとうは、お母さんにあまえたかったのではないでしょうか。ただ、そういうチャンスもなく、ストレートに表現できなかった、というより、B自身も、そのことに気づいていなかったのかもしれません。愛育に通いはじめた時も、おくり、むかえは、お父さんであったり、おばあさんであったり、お母さんであったりまちまちでした。でも、お帰り近くの時間になると、Bが不安定になることなどから、できるだけ、お母さんにしてほしいと、こちらでお願いしたのです。

記録より

○お帰りの時、Bは水遊びの最中で、とても楽しそうに、遊んでいた。しかし、門からはいってくる母親の姿をみつけると、無表情になり、パーッと室のロッカーの所へゆく。私が、体を拭いている間に母親がやってくる。母親に服をきせてもらうと、すぐに下駄箱へ

とび出し、門の方へ走ってゆく。(10月12日)

毎日、お帰りの時間になって、おむかえのお母さんの姿に気づくと、Bは、どんなに楽しそうに遊んでいても、パッと表情を変え、一目散で、お母さんの所でなく、着替えるために、室のロッカーの所にゆきます。そして、お母さんが、Bの身支度を整えると、もう、保育者がお母さんと話す間もなく、お母さんの手をひき、下駄箱へ、そして門へと走ってゆくのです。この時のBの緊張した表情から、どうしたらよいのかわからず、ストレートにとびこんでゆけないが、とても意識しているというお母さんに対しての心の動揺を感ぜずにはいられませんでした。

このような状況の中で、十月も後半をむかえ、日増しに寒くなってきました。水で遊ぶ時間は少しずつ短かくなり、他の遊びも少しずつふえてはきましたが、Bの遊びの中心はやはり水でした。はだかで、体を真赤にして、大きな声を出して、水と戦うように遊ぶBをみて、私の気持はあせります。水をとばす私の指先も、いたい程で、それが、よけいにBの心の緊張感を伝えてきます。「なんで、こんなにまでして、やるのだろう。」と、繰り返しながらも、少しずつできてきているBとの関係を育てること、それができなければなにもならないと自分にいいきかせ、じっくりつきあうことを心がけました。

水だけじゃ、ないんだね

記録より

○好きなおもちゃを探してきて、水たまりにいれる。何を思ったか、その一つである長ぐつに水を入れ、一人の保育者のトレーナーにかけにゆく。その反応を楽しむかのように二度、三度と、ケラケラ笑ってかけにゆく。(11月29日)

十一月になりました。Bの水遊びは続きます。でも、少しずつ、いろいろな変化があらわれてきました。今までは、「水遊びをしたい」というよりは「せざるをえな

い」という切羽詰まった感じをうけていましたが、この頃から少しずつ、水遊びを楽しんでいるようにみられる時間が増えてきました。もちろん、体全体での水しぶきは、Bが大きな声を出して最も興奮してやっているようにみえるのですが、それだけでなく、水しぶきによってできた水たまりに、好きなおもちゃを集めたり、水が落ちゆく先で、砂を掘るようになっているのをじっとみていて、砂をさわってみるなどして、水と面とむかっているだけでなく、水遊びを楽しんでいる様子がみられることが、多くなってきたのです。そして、水を私や、他の保育者にかけて、その反応を楽しんだり、水たまりに私をひっぱり、あたかも「いっしょにはいろう。」と言わんばかりに微笑みかけたりすることもありました。水を通しても、人に気持がむいてきているのを感ぜずにはいられませんでした。

そして、水遊び全体の時間もかなり短かくなってきました。

記録より

○はだかになって遊びはじめる。長い時間ブランコにのる。ひとりで乗っている時は、大きくゆらすと、声をたてて笑う。いっしょに乗ると、ひざにのってくる。ジャングルにのぼると、私のひざにすわって20分程のんびりすごす、結局、午前中は、水遊びをしなかった。（11月2日）

○午後、ジャングル、すべり台、ブランコへと私の手をひき、二人ですごす。午後は水をやらなかった。（11月5日）

十月までの水遊びのパターンが、少しずつくずれて、水遊び以外の遊びで過す時間が増えてきました。それも、どちらかというと、私とむかいあったり、ひざにのったり、二人がふれあっている感じの遊びが多いのです。

そして、朝のお弁当も、しだいに、だらだら食べるようになってきました。

記録より

○庭にお弁当をひろげたまま、遊びはじめる。私が、お弁当を片づけてしまうが、探す様子もない。結局、お弁当の時間に室にさそうと、お弁当をもって、庭の所定の所へ行って食べる。（11月5日）

この頃から、どうしても、朝、食べなくてはいられない状態ではないようなので、なるべく、お昼まで、待たせるようにしました。といっても、お弁当の時間になると、お弁当をもって、庭のいつもの所へいって食べるのです。体を動かしている時は、いいのですが、この時は、さすがに寒そうです。それで、服をもって行ったら、お弁当の時は、服をきるようになりました。

これらのことと平行して変わったことは、お帰りのことです。

記録より

○お帰りの時、母親に着替えさせてもらっている時、ニコニコしている。そして、私が母親と話をしても、そばで待つゆとりがある。（11月1日）

お帰りで、お母さんの姿がみえると、あいかわらず、パーッと走って入室します。しかし、お母さんが、Bに服を着せ、帰り支度をしている時の表情や態度に、少しずつ、ゆとりがでてきました。また、私がお母さんに、その日のことなどを報告している間、少しくらいなら、余裕をもって待てるようになってきました。

このように二学期の終わりには、緊張感のほぐれる時間が、ずい分多くなり、少しずつ動きや表情に余裕がでてきました。また、人との関係が育ちつつあるのもはっきり感じられ、やや緊張のほぐれた私でした。緊張していたのは、Bだけでなく、私もだったようです。

（つづく）

（愛育養護学校）

＊　＊

保育の一日 (5)

――存在世界としての保育――

津守　真

二、交わること（つづき）

4　子どもとおとなの葛藤について――相互性の危機と自我

一日の保育の過程には、おとなの考えと子どもの行為とが葛藤する場面がしばしば生じる。その場合、おとなにとって、自分自身の価値規準しか見えなくなり、それに感情的高揚が伴うと、同時にそれに固執する衝動も生じ、自分とは異った他者が共に生活している世界であることを認識できなくなる。そのとき、おとなと子どもとは出会うことができない。子どもはおとなから疎外された状態になる。

保育は、本来、子どもが自分の最善の可能性を発揮して生きることができるようにする営みである。子どもの行為をおとなが否定するところではそれはなしえられないだろう。子どもとおとなとが葛藤するところでも、お

となは子どもの行為に意味を見出し、相互性をもって応答するところに保育がある。

相互性をもって応答するというのは、感情のおもむくままに振舞うことではない。おとなが自分の衝動に任せて叱ったり要求することではないし、あるいはまた、強迫的義務意識にとらわれて、命令したり禁止するのでもない。保育者の行為は、いずれの極端に偏るのでもなく、具体的な状況に応じて、保育者自身がよく見て判断し、子どもと共に生活し成長する場をつくるのである。おとなの本能的欲求も、集団の秩序維持のための倫理も、いずれも人間生活に必要な機能であるが、いずれも人間を全面的に支配するものではない。人は自己の中心を保ち、その両者を使いこなすことによって、人間らしくなることができる。その点からいうならば、おとなと子どもとの間の相互性を可能にするのは、衝動や義務感に自らを委ねるのではない理性的な自我である。

E・H・エリクソンは、相互性(mutuality)を支える原理として、むかしから多くの社会や文化の中で重んじられてきた「黄金律」(Golden Rule)について論じ、相互性における自我の機能の重要性について述べている。[注1]「黄金律(ゴールデン・ルール)」とは、「人々にしてほしいと、あなたがたの望むことを、人々にもそのとおりにせよ」という新約聖書の一節に代表される倫理である。しかしこれはパラドックスを含んだ命題であって、人は互いに異質な独立した人格であるならば、自分がしてほしいと思うことと、他人がしてほしいと思うことと一致するとはかぎらない。そこで、バーナード・ショウが皮肉として「あなたが人からしてほしいと思うことは、他人に対してするな」[注2]というのも、異質な「他」と世界を共有する際の倫理の一面であろう。他人と自分との区別なく両者を束縛する道徳律は、理性的自我を破壊する力をもつ。そこで、高度に道徳的な人が非倫理的な行為をすることがある。道徳規準に対する偏執と、無制約の本能的衝動とは、表裏をなして同時に存在するもののようである。

エリクソンによれば、「高度の道徳原理の名のもとに、あらゆる下劣な復讐、拷問、大量虐殺などが行使されて

きた。そういうことからみると、黄金律（ゴールデン・ルール）は、人を敵の公然たる攻撃から守るのみでなく、友人の正義感から守ることをも意味するという結論に達する。[注3]」人間の心の中で道徳律を代表する超自我（スーパー・エゴ）の声は、かならずしも残虐であるとはかぎらないが、良き良心のバランスがくずれると、自らに対しても残虐になりやすい。内心の支配者の武器である「恥を知れ」という良心の声が、人間の心の全体を占拠し、それは個人を超えた集団の秩序維持のために、個人を抹殺する力を揮うようになる。個人の無意識の中にあって集団に仕える衝動は、強迫的かつ専制的であって、崇高な行為にもなるし、残酷な行為にもなる。エリクソンはこの点に言及し、人が超自我に偏執する傾向は、人類の頭脳が過剰に進化した結果であるとする。過去において、恐竜（ダイナレウル）が本能的衝動を過剰に発達させ、固い殻で身体の表面を過度に防禦することによって滅びたように、現代において、人類は、集団の秩序維持のための道徳意識――超自我――を過度に発達させ、それによって滅亡を招く危機に頻している。正義のためには、核の使用による大量殺人も是認され、人類全体が亡びることになるかもしれない。他方、この過程で、人は、落着いた理性と、人との間の相互性の愛を失うに至る。これは個人の崩壊である。人は本能的欲望の奴隷になるのではなく、超自我の道徳律に支配されるのでもなく、その両者の中間にあって両者を統御できる自我を確立するという課題を負っている。現代において、その必要は一層大きい。

エリクソンによれば、「黄金律」は相互性の原理にひとしい。「真に価値ある行為は、する者とされる者との間の相互性を強める経験であり、その相互性は、相手のみならず自分をも強めるものである。かくて、する者とされる者（他者）とは、ひとつの行為におけるパートナーである。[注4]」このことは、発達と教育の観点からみるならば、子どもがその年齢、発達段階、条件に従って強められるときには、おとなの方も、その年齢、発達段階、条件に従って強められる。このように理解するならば、黄金律は次のように云いかえられる。「他人を強めると共

に、自分を強めることができるように、他人に対してするのがよいことである。すなわち、自分自身の最善の可能性を育てるように、他人の最善の可能性を育てなさい」と。[注5]

黄金律を論じた長い論文を、エリクソンは、「ゆきて、それを学べ」(Go and learn it)[注6] というタルムードのことばで結んでいる。自我を強めることは、他人の可能性を伸ばそうとする日日の営みの中で学ぶことである。おとなのみでなく、子どもは、赤ん坊のときから、成長の時期に応じた仕方で、おとなとの相互性の中で日日学んでゆく。そして、おとなになったときには、次には、自分が子どもを育てる者として、子どもとの間で学びつづける。

神学者北川台輔は、現代の国際社会の中で葛藤する異人種の間の調停に尽くした人であるが、「人格の完成を索めて」という論文の中で、普通に個性化と訳されるインディヴィヂュエーション (individuation)[注7] という語を、「一人前になる」ということばであらわしている。[注8] これは自己の中心を発見してゆく人間の成長の過程という心理学用語である。北川によれば、一人前の人、すなわち、本当にでき上った人は少ない。「大事業を経営し、幾万の富を蓄えてその敏腕をうたわれながら、異人種を毛虫の如く嫌ったり、ちょっとした事にもすぐ癇癪を起すような人物は『一人前』とは云いかねる」。また、「大学者でありながら、近所の人達や婦人子供とさっぱり折合いのよくない人物も、これまた一人前ではあり得ない」。立派な職業についていても、世間体を始終心配して、「自分と自分の家族さえ世の中に迷惑かけずにやって行ければそれで自分の責任は完了したものと考える」のも一人前の大人とは云えない。古歌に「人多き人のなかにも人ぞなき　人と成れ人　人と成せ人」とあるように、一人前の人間になるということは生涯にわたってつづく課題である。北川はこのことを論じて、一人前になる個性化とは、自分一人でなしえられるものではなく、人と人との交わりの中でなしとげられるものであることを強調する。人は「他人との交わりを離れては自ら一人

前人間として生存し得ないという事実に心眼を開いて」「人との交わりの価値を知るまでに成人した人間」となり、「何にもまして交わりをとうとぶ所に一人前の人間の奥床しさがある」[注9]

しかしながら、この交わりは一方的なものではない。「これが実際上可能となるためには、人と人との間に先づ平等と独立とがなければならぬ。社会的な地位・階級・職業・学歴・人種・宗教の如何を問わず、一切人がすべて『神の前に平等なる魂』であり、他の何人によっても支配され強制されることのあってはならない独立人であり、更に各人が神によって良心の自由を与えられた人格であることを認め信じ且つ受諾しなければ、ここに云うところの交わりは成立しない」[注10]と北川は云う。ここではその宗教的意味についてはこれ以上ふれないが、価値観を異にする異人種間の葛藤の調停に生涯たずさわった著者が[注11]、一人の個人の人格の成長に、他人との交わりを尊重する認識が重要であることを強調していることは意味深い。もちろん、その交わりは、ここに述べられているように、独立した個人の存在と同時に対極をなして存在する相互性の交わりである。他人とすべてを共有し、共有させようとする、自他の区別のない集団性とは異る。P・ティリッヒが[注12]、人間の存在における両極性の中に、個人化(individuation)と参与(participation)を挙げ、この両者はひとつの存在の両極であり、相補的であり、切り離し得ないものであると述べているのも、同様のことと解してよいと思う。相互性を支えるものは、個人の自我のはたらきであり、また、自我が育てられるのは、相互性の交わりにおいてである。

保育におけるおとなと子どもとの間の葛藤は、異人種間の葛藤とは比較にならないほど容易であり、また、楽しいものである。しかしその根底にある構造においては共通なものがある。異質な他者が共に生活するなかで、異った価値をもちながら共存する生活をつくること、またその中から、共存する価値をつくり上げてゆくことである。どんなときにも、子どもが最善の可能性を発揮して生きられるように望み、そのことから目を離さないこ

とである。子ども自身が、おとなと共有する社会の価値を身につけ、更に新たな時代の価値をつくり上げてゆくのは、それによって可能になる。

注1　E. H. Erikson; Insight and Responsibility. W. W. Norton& Co. Inc. 1964 VI The Golden Rule in the Light of New Insight.

注2　同書 p. 222

注3　同書 p. 224

注4　同書 p. 233

注5　同書 p. 234

注6　同書 p. 244

注7　個性化（インディヴィジュエーション）は、C・ユングの人格理論で重要な概念である。

注8　北川台輔「人格の完成を索めて」一九五〇　篠原収二編「北川台輔さんを偲ぶ」昭49所収

注9　同書 p. 29～p. 30

注10　同書 p. 37

注11　北川台輔（1910～1970）は一九四四―一九五六に、日系米人牧師として米国における日本人、アメリカインディアン、黒人問題につくし、一九六〇年より世界基督教協議会より南ア連邦に派遣され、黒人と白人との調停に貢献した。晩年にはラオス、ベトナム問題を手がけた。

注12　P・ティリッヒ（P. Tillich 1886～1965）は、現象学の流れを汲む哲学者、神学者で、ロロ・メイの現象学的心理学の形成に大きな影響を与えた。

日本保育学会第35回大会の
お知らせ

期日　昭和57年5月15日（土）、16日（日）
会場　郡山女子大学、郡山女子大学短期大学部

問い合わせは、日本学会事務センター
TEL　03・815・1903です。

〔史料紹介〕

『邦訳 日葡辞書』⑦

――わが国中世の児童文化史研究によせて――

M・M・M

I字で始まる語

（承前）

イソアソビ（磯遊び）
浜辺での遊び。

イッサンバラリト（一山ばらりと）
ある寺院の人々全部。あるいは、その寺院の境内にいる坊主全員。また、比喩。一家や一族の者全員。

イッスンボウシ（一寸法師）
こびと。ヒキュウト（低人）と言う方がまさる。

イタイケナ（いたいけな）
美しい、やさしい、かわいらしい（もの）など。
（例）イタイケナ コ（いたいけな子）きれいでかわいらしい幼児。

イタワリ、ル、ッタ（労はり、る、った）
憐れむ、治療する、また、弱い者や幼児などを、愛情をこめて手厚く取り扱う。
（例）ワランベヲ イタワリ ソダツル（童を労はり育る）幼児をいつくしみかわいがって育てる。

イタヅラ（徒ら）
何もしないで怠けていること。

イタヅラモノ（徒ら者）
無精者、だらしのない者、怠け者。

イトケナイ（幼ない）
非常に小さな、または、幼年の。幼児などについて言う。

イシナゴ（擲石）

子供の遊びの一つ。小石を宙に投げ上げて、それを手の甲で受ける遊び。

イッシ（一子）
ひとり子。一人きりの子。

イッシン（一親）
一人の親。父一人、または母一人。

イイモライ（飯貰ひ）
目にできるものもらい。

ジャクハイ（若輩）
若者、あるいは、年の少ない者。また、謙遜するのに用いる語。
（例）ジャクハイナ　コトヲ　イフ（若輩な事を言ふ）年少の人か、知識の浅い人かが言うような事を言う。

ジャクネン（若年）若い年。

ゼンビ（全備）
完全になること、あるいは成就すること。
（例）シキシン　ゼンビ　スル（色身全備する）母の胎内で、人間の身体が形作られる、あるいは、人間の形を取る。

ジ（字）
文字
（例）ジヲ　トムル（字をとむる）子どもが文字を習う時にするように、上に紙をのせて文字を写し取る。

ジ（児）
チゴ（児）　幼児。他の音節、または、語と複合して用いられる。嬰児、みどり児など。

ジアイ（慈愛）
非常なやさしさと愛情でかわいがること。

ジボ（慈母）
心やさしい母、あるいは、愛情深い母。

ジダンダ（地だんだ）
足で踏みつけるさま。

ジドウ（児童）
チゴ、ワランベ。幼児。

ジヂョ（児女）
幼い女。

ジソン（児孫）
幼児。

ジシ（自子）
自分の子。

ジシ（児子）
幼児。

ジッシ（実子）
真実で、嫡出の子。

昨年のいまごろも、今年も、幼稚園の応募児が定員に充たないというはなしを身近にいくつもきかされている。それも並たいていの減少ではなく、例年は五十人も応募者があったのに、今年は十人にもみたないという工合である。私立だけのことではない。公立も、それから、東京だけではなく、地方でも、事情は同様である。このことは幼稚園関係者には周知のことであるけれども、それでも、個々の幼稚園で自分の園で幼児数が激減すると、保育の方法がわるいのではないか、応募の努力が足りないのではないかというような批判や反省となって、現場の保育を担当する人はつらい思いをする。また従来の比率でゆけば教師数が余ることに伴う不安がある。

幼稚園児の減少の大きな理由は、出生児の減少である。それは同胞数の減少だけでなく、結婚年齢の上昇に伴い、子どもを生む夫婦数が減少していることにもよるという。この傾向はまだ当分はつづくようである。

このことは個々の幼稚園にとっては、園の存立にかかわる重大な問題である。それに対しては、できるだけの検討をし努力を払うことは必要であろう。しかしその根本の理由が、個々の幼稚園の事情をこえた大きな問題にあることも間違いはない。そうとすれば、幼稚園に対する見方を根本的にかえてゆくことが必要となってきているのではないか。

眼をひろげて見れば、このことは単に幼稚園だけの問題ではない。幼児が減少しているということは、日本全体の問題である。若い生命力が減少しつつあるという問題である。単に将来の国力、生産力にかかわることだけではない。現在、すでに私共の周囲に、幼い柔軟な創造的エネルギーが失われつつあるという問題である。おとなが幼児に負うていることが大きいことに気付かされる。（T）

幼児の教育　第八十一巻　第四号

四月号　©　定価二七〇円

昭和五十七年三月二十五日　印刷
昭和五十七年四月　一　日　発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人　津　守　真

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九―一九六四〇番

⊙本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良品がございましたら，おとりかえいたします。

実践記録を通し保育の見直しを！

自由遊び再発見

新刊

自主性のある子ども、意欲のある子どもを育てる!!

子どもの自由感と自己充実感を保障し、子ども自らが考え、行動することを、時間をかけて育てるという〝自由な〟保育が最近見直されています。本書は、その具体的な実践のあり方を、やさしく、わかりやすく説いたものです。文字や数を〝教える〟ことよりも、もっと大切なものは何か、幼児教育の原点について本書と共に考えてみませんか。

野辺繁子・矢作邦子共著・B6判・288頁・定価1,200円 〒250円

私の保育どこが問題？

〝よい〟保育の中味をもう一度見直してみませんか？

子どもに困難なことはさせない。できるだけ楽に、嫌なこと、考えること、力のいること、などは全部保育者が先回りしてやってあげる。準備も完全。仕事もテキパキ。一見やさしいよい先生です。ところが「それでは子どもがダメになる」と言われてビックリ。保育日誌をもとに「ここが問題」と指摘された中から、特に参考になるものをまとめました。

本吉圓子・笠間典美共著・B6判・304頁・定価1,200円 〒250円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292－7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

伝統あるフレーベル館の8大月刊誌

―― 57年度は、内容がさらに充実しました。――

1―情操

キンダーブック

年少・年中児向けの絵本で、夢のある心たのしいお話は情操を豊かにし、創造力を高めます。

（ワイド画面）団体購読価　200円

2―観察　増頁しました!!

キンダーブック

年長児向けの絵本で、観察の眼を育て心情を豊かにする魅力いっぱいの観察絵本です。

（ワイド画面）団体購読価　250円

しぜん―キンダーブック 3

自然のようすや、その不思議がよくわかるよう編集された好評の科学絵本です。

（上製本）　団体購読価　300円

キンダー メルヘン

年少・年中児向けのお話絵本で、〝夢とゆとり〟が生まれるよう配慮されています。

（厚紙製本）　団体購読価　200円

キンダー

おはなしえほん

幼児の心を生き生きと育てる美しく感動的なお話は、繰り返して読んで楽しめます。

（上製本）　団体購読価　300円

たのしい がくしゅう

おおぞら

子どもの知的欲求に応えながら、よく考える子、遊び上手な子に育てる絵本です。

（総合絵雑誌）団体購読価　300円

創刊

ころころえほん

園生活で初めてふれる、3歳児のための明るい絵本。幼ない子とのスキンシップが楽しめます。

（厚紙製本）　団体購読価　200円

保育専科―今月のカリキュラム―

先生方の悩みに応える実践的な保育雑誌です。また別冊は年3回発行いたします。

定 価　350円（別冊とも年間6,900円）

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館